

近代翻訳史における嚴復の「信达雅」

その他のタイトル	YAN Fu ' s “ xin, da, ya ” in Modern Translation History
著者	沈 国威
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	55
ページ	A3-A41
発行年	2022-07-01
URL	http://doi.org/10.32286/00027184

近代翻訳史における嚴復の「信达雅」

沈 国 威

YAN Fu's "*xin, da, ya*" in Modern Translation History

SHEN Guowei

Yan Fu's formulation of "*xin, da, ya*" (faithfulness, expressiveness and elegance) exerted an immense impact on China's translation theory and practice in the 20th century. Translators and researchers have explored Yan Fu's "*xin, da, ya*" from diverse perspectives, and a large number of monographs and papers have accrued on this subject. However, the deductions derived from the extant discourse may not be appropriate. Xie Tianzhen, a translation theory scholar, believes that "*xin, da, ya*" should be reinterpreted, indicating that "*xin, da, ya*" originally emanated from Yan Fu's personal experience and experience. This author also believes that "*xin, da, ya*" is not a universal translation standard as much as it represents a solution to problems Yan Fu encountered between 1895 and 1896 during his conversion of *Tianyan Lun*. In Yan Fu's view, "*xin* = faithfulness" denotes loyalty to the original and is the starting point of translation, while "*da* = expressiveness" signifies the transmission of the meaning and content of the original work to readers and is the ultimate purpose of a translation task. In 1896, Yan Fu adopted numerous techniques to manifest "*xin, da* = faithfulness, expressiveness." The element of "*ya* = elegance" represents the standard of the article and symbolizes the indispensable style of accurately conveying the meaning and content of the original work. Yan Fu claimed that it was "easy to achieve '*da* = expressiveness' with the word method and syntax before the Han Dynasty." This opinion aligns with Zhang Taiyan's proposition that translators must be proficient in philology. In parallel, Yan Fu's "*ya* = elegance" shares some features with Hu Shi's "literary national language" and Zhou Zuoren's national language transformation, but opposes them in methodology. Yan Fu's term, "*xin, da, ya*," is closely related to the traditional Chinese literary theory statements, "the article should be honest," "if only language could convey meaning," and "if the article is indecent, it cannot be widely circulated." Yan Fu's iterations and actions related to his translation practice must be carefully confirmed to appropriately describe "*xin, da, ya*." Studies must also

simultaneously contemplate the limitations of Chinese in Yan Fu's time and consider the opinions of other translators.

キーワード：Yan Fu (嚴復)、*xin* = faithfulness, *da* = expressiveness, *ya* = elegance (信達雅)、Article specification (文章規範)、Chinese Philology (小学 [中国文字学])、Zhang Taiyan (章太炎)

はじめに

1898年6月、嚴復が『天演論』を公刊するや「優勝劣敗、物競天擇」の進化論は一大センセーションを巻き起こした。『天演論』は西洋の斬新な学説を中国社会に紹介したのみならず、これまでの「西人口述、中土筆録」といった翻訳法を捨て、原著に直に対峙し、翻訳する画期的なものであった。真の中国人による中国語の翻訳である。その後、外国語能力のある翻訳者が活躍する時代を迎えたが、『天演論』の「訳例言」(即ち「凡例」、筆者)にある「信達雅」は、翻訳作品を評価する不動の基準と崇められ、翻訳者の誰もが目指そうとする目標となった。¹⁾以来120年余りの間、「信達雅」に関しては侃々諤々たる論争が交わされたにもかかわらず、嚴復の「信達雅」はどこから来たのか、その意味するところは何なのかについては、必ずしも一致した結論に達していない。それどころか、翻訳論研究者の謝天振氏は、中国の翻訳思想の中で嚴復の「信達雅」ほど誤読されたものはないとし、これは「信達雅」を元の文脈と嚴復の翻訳実践から切り離して議論したためだと指摘している。謝氏はさらに、嚴復の「信達雅」の真意に対する誤解、誤読と誤解釈は、似て非なる翻訳基準を作り出し、中国の翻訳研究に深刻な悪影響を与えた、このような現状を打破するには、「信達雅」を歴史的な文脈に戻し、中国翻訳思想の発展史から、「信達雅」を新に解釈しなければならないと考えていた。そのため謝天振は嚴復の理論的貢献と限界を論述しようと論文「回到嚴復本意：再釋信達雅」に取りかかったが、まもなく病気で逝去し、3000字ほどのメモしか残らなかった。²⁾

「信達雅は元々翻訳者である嚴復の個人的な経験である」という謝氏の指摘には肯ける。また氏が引用した「嚴復は翻訳家として100年前に『天演論』の潜在的な読者を視野に入れ、コ

1) 杉田玄白は『解体新書』の凡例に「訳有三等、一曰翻訳、二曰義訳、三曰直訳」と述べている。「等」という字にはランク付けの意味もあろうが、こちらは訳語の問題である。沈国威『新語往還——中日近代語言交渉史』(北京：社会科学文献出版社、2020年)「新詞創造編・第1章」参照。

2) 謝天振主編『重写翻譯史』、浙江大学出版社、2021年。『重写翻譯史』は翻訳研究に関する文集で、国内外の翻譯史研究の重要な論文を集めたものである。「嚴復に戻る」、「翻訳、文脈と意義」、「翻訳研究の多次元の視点」、「文化外訳」と4編に分けて、近代翻譯史研究の脈絡を示している。なお、王宏志氏も、早くから同じ問題意識で、『重釈信達雅』を発表し、歴史的な文脈において「信達雅」を考察することを提唱した。王宏志『重釈信達雅：二十世紀中国翻譯研究』、東方出版中心、1999年。

コミュニケーションの達成を翻訳の第一の任務としたことは、極めて理論的価値のある創見と言わざるを得ない」という沈蘇儒の主張も当を得ている。³⁾但しこれまでの議論では、『原富』の翻訳経験と「信達雅」との関連性に言及したことはなかった。筆者は、「信達雅」は、翻訳の基準というより、1895-1898年当時、嚴復が『天演論』に加え、『原富』を翻訳する際、直面したより深刻な問題とその解決策であり、発展的に形成された嚴復の翻訳観であると考えている。嚴復の「信達雅」が如何に形作られ、それによって何を意図したかを解明するには、嚴復本人の言説とその翻訳実践の軌跡を丹念に点検すると同時に当時の中国語の可能性や他の翻訳者の主張も考慮する必要がある。本稿はこのような試みである。

1 「達」から「信達雅」に至って

『天演論』の翻訳については、1894年末か1895年の早い段階に、嚴復がすでにハックスリーの論文集 *Evolution & Ethics and other Essays*, 1894 を入手し、閲読済みで「論世変之亟」(1895. 2)「原強」(1895. 3)「救亡決論」(1895. 5)など嚴復が初めて発表した一連の時論は、ハックスリー論文集の読後感といった性質を有するものであると筆者は考えている。⁴⁾嚴復がいっそのこと論文集にある *Evolution and Ethics* を翻訳しようと思い立ち、準備作業に取りかかったのは、恐らく1895年5月前後ではないかと思われる。ハックスリーを翻訳するために彼はほかの執筆活動を一旦休止させるほどであった。『赫胥黎治功天演論』と題する最初の翻訳手稿の日付は「光緒丙申重九」、即ち1896年10月15日である。⁵⁾巻頭の序文で、「夏日如年，聊為逸訳」と書いている。その「夏日」は、過ぎ去ったばかりの1896年の夏を指すはずである。その後、嚴復は、手稿の訂正、潤色に移った。友人や師と仰ぐ呉汝綸(1840～1903)らの助言を受け、修正したものを1898年に『天演論』という書名で公刊した。

1896年10月15日付の手稿の冒頭に次のような4箇条からなる「訳例」がある。⁶⁾

- ① 一、是譯以理解明白為主，詞語顛倒增減，無非求達作者深意，然未嘗離宗也。
- ② 一、原書引喻多取西洋古書，事理相當，則以中國古書故事代之，為用本同，凡以求達而

3) 謝天振主編『重写翻訳史』、杭州：浙江大学出版社、2021年、第40-41頁。沈蘇儒『論信達雅——嚴復翻譯理論研究』、北京：商務印書館、1998年、第57頁。

4) これら嚴復が最初に公表した文章にハックスリーの主張を彷彿させる箇所があるからである。特に「救亡決論」後半の部分は、『天演論』「導言二 広義」と論旨も表現も同じである。沈国威「赫胥黎的 Evolution 與嚴復的“天演”」、『亞洲概念史研究』第7卷、商務印書館、2021年6月、第9-62頁。

5) 嚴復『天演論』手稿の序文、王弼主編『嚴復集』、北京：中華書局、1986年、第5冊、第1321頁。

6) 嚴復『天演論』手稿「訳例」、『嚴復集』第5冊、第1412-1413頁。

已。

- ③ 一、書中所指作家古人多希臘、羅馬時宗工碩学，談西学者所当知人論世者也。故特略為解釋。
- ④ 一、有作者所持公理已為中国古人先発者，謹就譴陋所知，列為後案，以備參觀。

これは、「信達雅」の「達」の原形と言えよう。公刊した『天演論』には「訳例言」が付され、日付は光緒二十四年四月二十二日、即ち 1898 年 6 月 10 日であった。「信達雅」は、この 7 箇条からなる「訳例言」に初めて完全な形で登場したのであるが、「訳例」から「訳例言」に至ってこの 2 年近くの間、翻訳に対する厳復の認識がより深められ、対処法も豊富になった。以下に詳述するが、これには、「訳例言」を執筆した 1896 年 10 月 15 日までにすでに着手した『原富』の翻訳が大きく関係している。厳復の言説を詳細に点検する前に、議論のお膳立てとしてまず「信達雅」に関する筆者の理解を以下に掲げておく。

- ・「信」は、忠実、つまり翻訳者が原著を内容と形式の両方において忠実に訳書に再現すること；
- ・「達」は、伝達、つまり翻訳者が原著の意味内容を読者に過不足なく伝えること；
- ・「雅」は、訳文は優れた文章と認める言語社会の文章に対する規範意識に合致することだけでなく、原著の機微まで表現できること。

以下、取りあえずこの理解を踏まえ、議論を進めていく。また議論を行う便を考え、「訳例言」原文の関連部分を意味の纏まりに区切り、番号を付けておく。⁷⁾ (以下の議論では、照合のために和文訳の後にその番号を示す)

- ① 一、訳事三難：信、達、雅。求其信已大難矣，顧信矣不達，雖訳犹不訳也，則達尚焉。
- ② 海通已来，象寄之才，隨地多有，而任取一書，責其能與于斯二者則已寡矣。其故在浅嘗，一也；偏至，二也；辨之者少，三也。
- ③ 今是書所言，本五十年來西人新得之学，又為作者晚出之書。

7) 厳復『天演論』「訳例言」、『厳復集』第 5 冊、第 1321-1323 頁。

- ④ 訳文取明深義，故詞句之間，時有所頗到附益，不斤斤于字比句次，而意義則不倍本文。
- ⑤ 題曰達旨，不云筆訳，取便發揮，實非正法。什法師有云「学我者病」。來者方多，幸勿以是書為口實也。
- ⑥ 一、西文句中名物字，多隨拳隨釋，如中文之旁支，後乃遙接前文，足意成句。故西文句法，少者二三字，多者數十百言。假令倣此為訳，則恐必不可通，而刪削取徑，又恐意義有漏。
- ⑦ 此在訳者將全文神理，融會于心，則下筆抒詞，自然互備。至原文詞理本深，難于共喻，則当前後引襯，以顯其意。凡此經營，皆以為達，為達即所以為信也。
- ⑧ 一、『易』曰：修辭立誠。子曰：辭達而已。又曰：言之無文，行之不遠。三者乃文章正軌，亦即為訳事楷模。故信、達而外，求其爾雅。
- ⑨ 此不僅期以行遠已耳，實則精理微言，用漢以前字法、句法，則為達易；用近世利俗文字，則求達難。往往抑義就詞，毫厘千里，審擇于斯二者之間，夫固有所不得已也，豈鈞奇哉！不佞此訳，頗貽艱深文陋之譏，實則刻意求顯，不過如是。
- ⑩ 又原書論說，多本名數格致，及一切疇人之學，倘于之數者向未問津，雖作者同國之人，言語相通，仍多未喻，矧夫出以重訳也耶！
- ⑪ 一、新理踵出，名目紛繁，索之中文，渺不可得，即有牽合，終嫌參差，訳者遇此，独有自具衡量，即義定名。
- ⑫ 顧其事有甚難者，即如此書上卷『導言』十余篇，乃因正論理深，先敷淺說。僕始翻「卮言」，而錢唐夏穗卿曾佑，病其濫惡，謂內典原有此種，可名「懸談」。及桐城吳丈摯父汝綸見之，又謂卮言既成濫詞，懸談亦沿釋氏，均非能自樹立者所為，不如用諸子旧例，隨篇標目為佳。穗卿（夏曾佑）又謂如此則篇自為文，于原書建立一本之義稍晦。而懸談、懸疏諸名，懸者玄也，乃會撮精旨之言，與此不合，必不可用。于是乃依其原目，質訳導言，而分注吳之篇目于下，取便閱者。
- ⑬ 此以見定名之難，雖欲避生吞活剥之誚，有不可得者矣。他如物競、天擇、儲能、效實諸名，皆由我始。一名之立，旬月踟躕。我罪我知，是存明哲。
- ⑭ 一、原書多論希臘以來學派，凡所標舉，皆當時名碩。流風緒論，泰西二千年之人心民智系焉，講西學者所不可不知也。茲于篇末，略載諸公生世事業，粗備學者知人論世之資。
- ⑮ 一、窮理與從政相同，皆貴集思廣益。今遇原文所論，與他書有異同者，輒就謬陋所知，列入後案，以資參考。間亦附以己見，取『詩』稱嘷求，『易』言麗澤之義。是非

然否，以俟公論，不敢固也。如日標高揭己，則失不佞懷鉛握槧，辛苦逐訳之本心矣。

(以下省略)

2 「信」について

「訳事三難信達雅」では、「信」は、第一の難関である。これは基本的に原著と翻訳者の緊張関係を意味している。中国の場合、東漢以降の仏典翻訳が書面語の翻訳の始まりであるが、『翻訳名義集自序』には「翻訳とは梵語を中国語に置き換えることであり、発音は異なるが、意味は大同である」とある。⁸⁾ 音声は特に意識されたのは、口述者と筆録者の分業による翻訳方法と関係するためであろう。「義則大同」からも分かるように、翻訳は、意味の等価的な移転が期待される。⁹⁾ 異なる文化、文明が接触し、翻訳が生まれる。英語の translate、中国語の「訳」（「訳者移也」）は、語源的にいずれも物品の運搬という意味があり、必然的に非破壊性（完全性）が含意される。しかし書面語による翻訳は自然に成立する産物ではなく、蓄積的に徐々に実現する知的作業である。従って、翻訳を成し遂げるための備えが当然問われる。筆者は、このような備えには3つの側面があると考えている。つまり、1、翻訳者の準備；2、読者の準備；3、訳出言語の準備である。詳細は以下に述べるが、準備が整わなければ翻訳は成立しない。翻訳史の研究は、この準備過程を究明するものである。『天演論』について言えば、1895年当時、嚴復が翻訳に着手する際、等価的な移転、つまり原著に対する忠実さの実現には次のような2つのハードルをクリアしなければならないであろう。

- 1、翻訳者の知識上の準備、これには外国語の知識と専門知識が含まれる；
- 2、原著の意味内容を正確に再現する訳出言語の可能性；

1は、翻訳者の基本的な素質と言えよう。翻訳するには、まず原著を理解できる外国語能力と専門知識を有しなければならない。1890年代当時、英語の分かる人は必ずしも少なくなかったが、科学書の翻訳者としては適任者が極めて希であった。嚴復が次のように指摘している。

8) 『翻訳名義集・自序』「夫翻譯者，謂翻梵天之語轉成漢地之言。音雖似別，義則大同。」羅新璋編：『翻譯論集』、北京：商務印書館、1984年、第51頁。

9) 但しここでは、内容的等価と形式的等価を必ずしも区別していなかった。

外国と貿易を始めて以来、通訳は各地にいることはいるが、任意の書物を訳させても「信」「達」を達成できる訳者は少ない。これには深く探求しないこと、専門知識がないこと、翻訳作品の善し悪しが分かる人が少ないこと、という三つの原因がある。(②)

(ハックスリーの) この本の内容は、50年この方、西洋人が新しく発明した学問に基づくもので、また著者の晩年の書物でもある。(③)

つまり英語力以外に専門知識が大きな問題となり、最新の学説は、古い知識では翻訳することが極めて困難だ、また『天演論』の原書は著者の学問の集大成なので、これまでの著述を踏まえ、総合的に理解する必要があるということである。

2は、訳出言語の限界性である。翻訳は意味内容の異言語間の等価的転換と言う以上、原典言語と訳出言語は表現上において同等な可能性を持たなければならない。しかし翻訳史的に見ればそれはむしろ幻想である。ソシュール以降の現代言語学では、言語には優劣の別がなく、いわゆる文明社会で用いられている言語にせよ、未開部族で使用されている言語にせよ、その気があれば、表現したいことが表現できるとされる。しかし一方、言語はそれぞれ独自の発展段階にあり、他の文明より体系的な知識を取り入れる(翻訳)には、言語自身も準備する必要があると筆者は考えている。嚴復がハックスリーの論文を翻訳する際、英語の内容を忠実に移入するには、中国語はまだ準備が整っていなかった。具体的には次のような2つの大きな障壁がある。

一、語彙レベルでは中英の単語間の対応関係がまだ構築されていない。つまり訳語がまだ存在しない。

二、文のレベルでは、中英の言語構造が大きく異なっている。例えば中国語は英語のように長い修飾部を取り入れることができない。

訳語について、嚴復は、「訳例言」で次のように言っている。

新しい学説が次から次へと現れ、専門用語は多いが、それを中国語に求めても得られない。たとえ見つけた場合でも両者が微妙に異なる。このような場合、訳者は自ら考え、原著の意味に即して訳語を決めなければならない。(⑩)

訳語はどこから来るのか。今なら間違いなく辞書からだと言えるが、嚴復が『天演論』の翻訳に着手したとき、利用できる辞書はまだ存在しない。嚴復は、「思い起こせば30年前、英語を初めて習うとき、学校から広州出版の辞書を与えられた。それは千語くらいのもので、意味

も完全ではなかった。しばらくすると『五車韻府』なども出てきたが、教会が編纂したもので、その多くは西洋人が中国語を学ぶためのものであった」と回想している。¹⁰⁾ 訳語が存在しない現実に直面し、巖復は、「この時は自分の判断で原著の意味に即して、訳語を決めざるを得ない」と言っている。(⑩) 訳語の選定には、既存の語から見つけるか、新たに製作するかという2つの方法があるが、既存の語から訳語としての確かな語を見つけては決して容易なことではない。たとえ意味の近い語があっても、巖復は「中国語と英語はどこかですれ違っている」(終嫌参差)と感じてしまう。それでも見つからない場合は、みずから創作しなければならないが、巖復は、「例えば物競、天擇、儲能、效実などは、いずれも私のはじめて作ったものである。1つの訳語を確立するには長い時間をかけた。(新語を乱造する) 罪の深さを十分承知しているが、志を知ってほしい」(⑫) と訳語の制作を公言して憚らなかったことに留意したい。というのは、当時中国の文章界を支配する桐城派の文章理念によれば、中国の典籍に出典のない語を「闕入之字」と称し、詩文にそれを用いることを厳しく戒めていたからである。(後述)¹¹⁾

巖復は、「訳例言」で訳語創作の苦労談を語っている。それによれば巖復は、prolegomenaを最初「卮言」と訳したが、友人の夏曾佑は、それは濫用された悪い言い方だとし、仏典にある「懸談」を提案した。しかしその両方とも呉汝綸によって否定された。呉汝綸は、諸子の例に従って、節ごとに題目を付けた方がよいと助言した。呉の意見について夏曾佑は、また節ごと題目を付ければ、それぞれ独立した文章になるので、原著のように1つの主旨をめぐる書かれた書物の印象が薄れる嫌いがあると指摘している。巖復も「懸談」、「懸疏」などでは、「懸」は、深奥であって、抽象的という意味なので、原著にマッチせず、絶対使ってはならないと考えた。そこで巖復は原文の意味に従い、素直に「導言」と訳し、呉汝綸が付けた篇目を番号付で付記することによって、訳文に一体性を持たせると同時に読者の読みやすさも考慮し

10) 巖復「尚憶三十年以往，不佞初學英文時，堂館所頒獨有廣州一種，寥落數百千言，而義不備具。浸假而有『五車韻府』等書，則大抵教會所編輯，取便西人之學中國文字者耳。」(商務書館華英音韻字典集成序、1902)。巖復は1867年、14歳で福建船政學堂に入学した。學堂のフランス人教師、日意格(Prosper Marie Giguel, 1835~1886)が*Mechanical and Nautical Terms in French, Chinese and English*という術語集を編輯し、機械関連の術語を1962語収録している。この術語集は、後に盧公明(Justus Doolittle, 1824-1880)によって『英華萃林韻府』に取り入れられた。沈國威編著『近代英華華英辭典解題』、閩西大學出版部、2012年、第170頁参照。『五車韻府』は、モリスンの『字典』(1815-1823)第二部の書名である。19世紀60年代以降、上海などで石印本の『五車韻府』の簡略本と墨海書館による再版本(1865)が出回った。

11) 沈國威『一名之立旬月踟躕』(北京：社會科學文獻出版社、2019年)、第8章参照。『原富』を翻譯する際、訳語を新作すべきかどうかについて、巖復も大いに困惑し、呉汝綸に助言を求めた。後述。同上第8章も参照。

た。(①)

嚴復は、『普通百科新大辞典』(1911)の序文で、

今夫名詞者、訳事之権輿也、而亦為之帰宿。言之必有物也、術之必有涂也、非是且靡所托焉、故曰権輿。識之其必有兆也、指之其必有筈也、否則随以亡焉、故曰帰宿。¹²⁾

と述べている。その意味するところは、「名詞」とは翻訳に用いられる語句で、つまり訳語のことである。訳語は外国語の意味概念を伝えるもので、翻訳の前提である。訳語がなければ翻訳そのものも存在し得ない。翻訳の始まりと言う所以である。良い訳語は意味概念の特徴を捉え、意味が明晰で、覚えやすいものでなければならない。読者にとって訳語は翻訳の落ち着き先で、故に終着点と言うわけである。この発言は嚴復が翻訳活動をほぼ終えた時に述べられたもので、訳語を選定したり、制作したりした際、嚴復が目指した訳語の理想像と言えよう。

訳語のほかに中英の文構造上の違いも大きな障害になっていた。嚴復は、「英語では文の中の名詞は、いつも関係節によって後ろから説明されたり、補足されたりする。中国語の割り注のようである。従って英語の文は、短いものは二三の語からなり、長いものは数十、百語以上のものもある。英語のように訳出すれば絶対通じないであろうが、削除でもすれば意味が欠けたものになる」と指摘している。(⑥) 唯一の解決法は、「訳者はまず全体を十分に理解するように心掛け、そうすれば訳文はおのずから原著の意味を完全に伝えることが出来る」とのことである。(⑦)

言語類型学の知識によれば大多数の SVO 型言語では、修飾成分は被修飾成分の右側（即ち後部）にある。文中の任意の成分は、関係代名詞のような小辞に導かれる修飾成分によって修飾することができる。関係代名詞の存在により、記憶の負担に許される限り、文は無限に長くなることができる。しかし、同じく SVO 型言語の中国語は、アルタイ言語の強い影響を受け、古代中国語のような修飾形式、つまり修飾成分は、被修飾成分の後方（右側）から来る形が失われた。従って、中国語では名詞を修飾し、限定する連体修飾機能が非常に貧弱である（助詞「的」が正式な文章に用いられるのは 1920 年代以降のことである）。¹³⁾

嚴復は、『英文漢詁』(1904)の中で、Relative pronouns を「復牒称代」と訳し、関係代名

12) 嚴復『普通百科新大詞典序』(1911年2月28日)、『嚴復集』第2冊、第277頁。『普通百科新大詞典序』は黄摩西主編、上海国学扶輪社1911年(宣統三年)刊行で、中国最初の百科辞典である。

13) 中国語の欧化文体に関して、王力の『漢語史稿』、北京師範学院編著の『五四以来漢語書面語的變遷和發展』(商務印書館、1959)などがある。但しいずれも連体修飾節の問題を取り上げていない。

詞によって導入された関係節の存在は、中国語と英語の形式上の最も大きな違いであり、これはまた英語学習の難関でもあると指摘し、次のように説明している。¹⁴⁾

このようなものは、中国語にはないと言って良い。中国語と英語との間の最も大きな相異である。西洋言語では、定の動詞、Finite Verbs には、必ず nominative case (主格) がある。また往々にして文の中にさらに文があって、文中の名詞を解釈する。その際必ず前出した名詞に対してもう一度説明を行わなければならない。そうして初めて文の意味が完全なものとなる。文の中に文が含まれ、バナナを剥くように三層四層にもなる。法律の文章や条約、契約では、意味の曖昧さを解消しようとするとき、このような関係節を持つ文が多用される。百語以上並べ立て、1つの文とする。これは初心者にとって英語の難しいところである。¹⁵⁾

中国語と英語は、元々異なる種類の言語で、文の構造をはじめ、多くの相違点が存在している。加えて『天演論』に用いられた古典中国語は、センテンスが短く、修飾成分も貧弱であった。これは、概念に対する厳密な定義に極めて不利である。¹⁶⁾ 嚴復は概念の定義とその言語形式に強い関心を示したが、『天演論』、そしてその後の『原富』でも、定義の問題は未解決のままであった。¹⁷⁾ 古典中国語にどのような文形式が西洋の科学書の翻訳に用いられ得るか、1896

14) モリソンは『英吉利文法之凡例』(1823)の中で、関係代名詞も関係節も取り上げていなかった。ロブシャイト(W. Lobscheid, 羅存徳, 1822~1893)は、その中国語の文法書: *Grammar of Chinese Language* (1864)、*Chinese-English Grammar* (『英語文法小引』1864)では、Relative pronouns を「倫替名字」と訳し、例文を挙げていたが、説明はなかった。*Grammar of Chinese Language*, 1864, Part I, pp.37-39; Part II, pp.23-26; 《英語文法小引》, 1864, II, pp.8-10。

15) 嚴復「此類之字，幾為中文之所無，中西句法大異由此。西文凡有定之云謂字 Finite Verbs，皆必有其主名 Nominative Case，又往往有句中之句，以註解所用之名物，於是前文已見之名，必申牒復舉，而後句順，每有句中之句，至三四層，如剝蕉然，而法典之文，如條約合同等，欲其所指不可游移，其如是之句法愈衆，或聚百十字，而後為成句者，此西文所以為初學者之所難也。」『英文漢沽』篇六、称代部、汪征魯ほか主編、『嚴復全集』、福州：福建教育出版社、2014年、第6卷、第131頁。

16) 他の言語を中国語に翻訳するときにも連体修飾の問題にぶつかる。例えば黄遵憲の『日本国志・刑法志』である。沈国威『新語往還——中日近代語言交渉史』「詞彙交流編」第一章参照。現代中国語では、連体修飾の機能が改善され、前置詞「对」を用い、目的語を動詞の前に置き、形式動詞の「進行」「加以」を使うことにより、目的語はより複雑な連体修飾を受けることが可能となった。

17) 嚴復は「若夫翻譯之文体，其在中国，則誠有異于古所云者矣，私氏之書是已。然必先為之律令名義，而後可以喻人。設今之訳人，未為律令名義，闕然循西文之法而為之，読其書者乃悉解乎？殆不然矣。」と述べ、術語定義の重要性を指摘している。「與梁啓超書二」、『嚴復集』第3冊、第516頁。なお、連体修飾成分の長大化、複雑化は、中国語が近代から現代へと発展していく上で最も大きな変化であったと筆者は考えている。

年当時、嚴復に与えられた選択の余地が殆どなかった。

いわゆる「信」、つまり原著に対する忠実さの実現には、翻訳者の姿勢も大きく関わっている。翻訳研究では、起点言語重視（原著本位）か、目標言語重視（訳書本位）かという議論があり、また異化（foreignization）と同化（domestication）の捉え方もある。このような翻訳者の姿勢は、書籍による文化交流、言語接触がもたらした翻訳活動の初期段階では、必ずしも選択可能なオプションではない。嚴復は、その信を求めるだけでもすでに大いに難しいと嘆き、(①) その要因の1つを適格な訳者の不足に帰している。『天演論』が刊行した後、嚴復は、章太炎が曾広銓の協力を得て訳出したスペンサーの『進歩について』を取り上げ、その誤訳を厳しく非難している。¹⁸⁾ 嚴復は、二人の訳者は「天地人、動植、性理、形気、名数諸学」の知識がなく、スペンサーの原著を理解できず、また「口述筆録」という古い翻訳方法も原著を正確に翻訳することが出来ないと考えていた。¹⁹⁾ 筆者は、上記の原因に加え、章太炎が言っているように中国語自身の未発達の問題があったと指摘しておきたい。（後述）

3 「達」について

「信達雅」のうち、「達」は、これまでの議論の中で最も曖昧であった。筆者は「流暢」「通暢」ではなく、「通達」或いは「伝達」、つまり「伝える」と解釈したい。漢籍語としての「通達」は、「通行、到達」「通曉、洞達」「溝通、傳達」などの意味がある（『漢語大詞典』）。このように「達」は、訳者が原著者と読者の間に立ち、原著の意味内容を訳文によって原著者から読者に伝えられるという意味である。そうであれば、訳者の翻訳作業は、読者の受容能力を考慮に入れた上で行われなければならない。嚴復は「原著は、論理学、数学、物理学、化学及び自然科学全般に基づくものが多く、それらについて知識がなければ、著者と同じ国の人で、言葉が通じ合っても多くの内容が理解できないであろう。まして（外国人が）翻訳（を通して理解すること）である」と言っている。(⑩) 正に読者の理解可能性を意識した発言である。科学書の受容は、科学の常識が必要になるが、1898年当時、言うまでもなくエリート層を含め、中国の読者にそれが期待できない。その点を見越した嚴復は、訳しても何の効果も期待できないので、忠実さを追求するよりも、読者に合わせて、伝達を第一に考えようと言っている。

18) 嚴復「訳才豈易言哉！曩聞友人言，已訳之書，如『譚天』、如『万国公法』、如『富国策』，皆紕謬層出，開卷即見。近見『昌言報』第一冊訳斯賓塞爾『進説』数段，再四読，不能通其意。因托友人取原書試訳首段，以資互発。乃二訳舛馳若不可以道里計者，『昌言報』一述一受，貿然為之，無怪其滿紙噉噬也。」「論訳才之難」、1898年9月1日『国聞報』、『嚴復集』第1冊、第90-92頁。

19) 嚴復は、特に曾氏の英語力に触れていなかった。曾氏について、彭春凌著、『章太炎訳斯賓塞文集研究、重訳及校注』、上海人民出版社、2021年、第63頁参照。

(①) 手稿の「訳例」ではそのための方策が示されている。以下、少し詳しく見ることにしよう。

「訳例」の①では、『天演論』の翻訳は理解しやすさを主とし、語句の順序の調整や増減を行うのも、原著者の意味を確実に伝えるがためにほかならないが、訳文は原書の意味を逸脱したことはないと言っている。これは、「訳例言」の④と同じ趣旨である。厳密な対訳は、受容サイドからみれば無意味である以上、訳文が、原著から遊離するもやむなし、「翻訳」と言わずに「達旨」というのは正にそのためである。いわゆる「翻案」の登場である。これはもちろん正しい翻訳法（訳事楷模）ではない。著名な仏典翻訳者の鳩摩羅什（クマーラジーヴァ）が言うように私の真似をしてはいけぬ。厳復も、これからの翻訳者も『天演論』を口実に、悪訳を正当化すべきではないと釘を刺した。厳復はまた、翻訳するに当たって、訳者はまず原著の意味を十分に理解するように努めるべく、そうすれば訳出する時、おのずから原著の意味を正しく伝えられる。原著の理解しにくい箇所は、原著にないものを補足し、原著の意味を明らかにすべきである。このような工夫は、すべて「達」、即ち原著の意味内容を読者に伝え届けるためであると主張している。(⑦)

②では、厳復は、原著に引用されている西洋の神話、伝説の代わりに中国の故事、伝説で代用すると断っている。中国の読者にとって表現上、連想上の修辞効果が同じなので、すべては「達」を実現するために過ぎないとのことである。手稿段階ではこの方法が多く採られたが、後に呉汝綸の助言を受け入れ、改めた。(後述)

③は、「原書に引用された書物の作者や先学はいずれもギリシャ、ローマ以来の著名な学者であって、西学を知ろうとする人は彼らの事蹟を知らなければならないので、簡略に記述した」とし、読者に背景的知識を提供している。「訳例言」では、さらに「原書にはギリシャ以来の学派が多く取り挙げられているが、いずれも著名な学者であって、彼らの学説は、西洋では二千年の間、人々の知識に貢献している。西学を知ろうとする人は知らなければならないので、文末に先学諸氏の略歴と事蹟を記し、その人となりと学問を知る上での知識とする」と、その趣旨をより明確に述べている。(⑭) 厳復が翻訳に注釈、^{コメント}案語を多用していることは有名である。初めて西洋の書物に接する読者にとって、よりよく理解する上で欠かせない情報である。注釈、案語はいまの翻訳にもよく見かける技法である。

④は、厳復は、ハックスリーの学説の中に中国の古人が早くも述べたものがあるとし、参考のために文末に挙げていると言っている。2年後の「訳例言」では、科学の探究は、国家の統治と同じく、衆知を集め、有益な意見を広く吸収することが大事だ。原著の学説に他の書物と関係があるものを参考のために挙げ、訳者の意見も加えておいた。『詩経』にある「求其友声」と『易』にある「君子與朋友講習」という趣旨だ、このようなやり方の当否は、識者の公論を

待つと書いている。(15)「訳例」よりかなり低姿勢になった。手稿では嚴復は、案語と序文で中国の典籍を頻繁に引用し、原著にある西洋の概念を解釈して、東西の意志疎通を図ろうとしていた。嚴復にしてみれば、中国の伝統的な学問には、西洋のそれと共通した原理があり、互いに解釈し合うことが可能だと考えていた。嚴復は中国の伝統思想に用いられる術語、概念解釈で西洋の術語と概念を理解することは附会ではないと言っている。²⁰⁾

以上は「訳例」(1896. 10. 15)に見られた嚴復の考えであるが、その後、嚴復は、吳汝綸の助言(1897. 3の書簡)を取り入れ、手稿を修正した上で、吳汝綸に「拙訳『天演論』は最近添削し終えた。自説の多くは訳文から削除、または文末の案語に入れた。晋以降の仏典翻訳の方法をすべて採り入れることはできなかったが、前より良くなっている」と報告した。²¹⁾手稿にある「易曰、韓非曰、孟子曰」などが刊行本では64カ所削除され、訳者のコメントも文末の案語に移された。²²⁾

このように「訳例」にある4箇条はいずれも「達」を実現するための嚴復の創意工夫であった。③は、いまの翻訳においてもよく見られる方法であるのに対して、①、②、④は、初期の翻訳にこそ用いられる技法だが、中国語の近代化と読者の知識の獲得に従って、徐々に消滅されていく。「訳例」の4箇条は、「訳例言」において表現などがより詳細になったほか、「漢以前字法、句法、則為達易；用近世利俗文字、則求達難」という翻訳規範に関する文言が追加された。(⑧⑨)これについては、第五節で、考えてみたい。

4 「雅」について

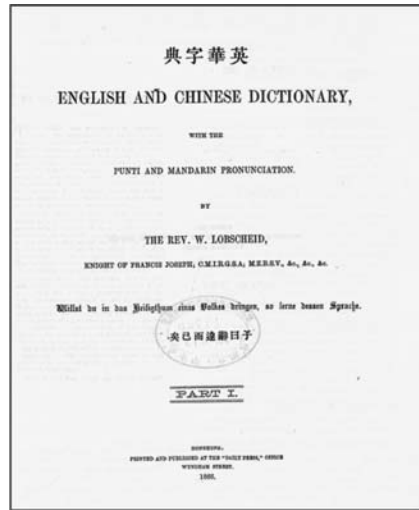
「訳例言」では、嚴復は「易に修辭立誠とあり、また孔子の言葉に辭達而已と言之無文、行之不遠がある。いずれも「文章正軌」であり、翻訳においても従わなければならないルールである。そのため、信、達以外に雅馴を求めなければならない所以である」と書いている。(⑧)嚴復のいう「文章正軌」は、つまり文章規範(norms)のことで、ある言語社会において共有される文章に関する価値判断である。文章規範についてはそれが万古不易のものか、それとも時代と共に進化するものかという2つの態度がありうる。上記の三箇条から分かるように、嚴復は、二千年以上も昔の秦漢の文章に規範を求めようとしたのである。同時に「訳事楷模」で

20) 「與梁啓超書二」、『嚴復集』第3冊、第516頁。なお、このような方法は、嚴復研究では「格義」と呼ばれている。韓江洪『嚴復話語系統與近代中国文化轉型』、上海訳文出版社、2006年、第163、165頁。

21) 嚴復「拙訳『天演論』近已刪改就緒、其參引己說多者、皆削歸後案而張皇之、雖未能悉用晋唐名流翻譯義例、而似較前為優」、『嚴復集』第3冊、第520頁。「嚴復致吳汝綸函」、1897年11月9日(旧曆十月十五日)。

22) 『嚴復集』第5冊、第1410-1476頁。

もある三箇条のうち、「修辞立誠」は、表現は誠実でなければならないという文章作成の心得であって、既成の文章を他言語に移訳する翻訳者とは、無関係であろう。「辞達而已矣」という孔子の言葉は、言いたいことを聞き手にはっきり伝えれば良い、それ以上でも以下でもないという趣旨で、いわゆる「達辞」である。しかし孔子はまた「言之無文，行之不遠」とも言っている。言葉に文彩がなければ広がらないという意味で、いわゆる「行遠」である。「達辞」と「行遠」は、前者は最低の基準で、後者は高い目標となる。19世紀の来華宣教師らは、好んで孔子のこの言葉を引用する。例えばロブシャイトは、自分の『英華字典』の扉に掲げている。外国人である彼らは、外国語の意味を中国語で確実に伝えることには必ずしも自信があるわけがなく、孔子の言葉は一種の予防線である。この点に関しては、厳復を含め、初期の翻訳者も同じ問題に直面するのである。²³⁾しかし言語社会がいつまでも「達辞」に甘んじるわけがなく、「行遠」への発展が求められる。「訳事楷模」は、翻訳のあり方に対する言語社会の暗黙の了解であるが、²⁴⁾時代の特徴も強く反映されるものである。中国の文人はかねてから古文復興の傾向があり、西洋宣教師の文章は、この規範から大きく逸脱したので、士大夫らが見向きもしなかったのである。厳復は英語に精通し、原書の内容についても豊富な知識と的確な理解がある。「於中学西学，皆為我国第一流人物」と称される所以である。²⁵⁾しかし厳復が一旦、英語のテキストを中国語に変換しようとする時、まずどのような文章スタイルを採用するかという言語形式の問題に直面したのである。²⁶⁾ハックスリー



『英華字典』の扉

スリーの二編の文章は、1つは講演の原稿で、もう1つは講演の内容をより分かりやすく理解

23) 1898年『達辞』という英華辞書も刊行された。編者は広東の人、莫若謙である。沈国威「近代英華字典環流：從羅存德、井上哲次郎到商務印書館」、台湾聯經出版社『思想史』7專号：英華字典與思想史研究、2017年、第64-102頁。

24) 柳文章ほか編『日本の翻訳論』、法政大学出版局、2010年、第37頁。

25) 梁啓超「紹介新著・原富」、『新民叢報』第1号、1902年2月、第114頁。

26) 沈蘇儒は、「厳復が『天演論』の翻訳に着手したとき、“之乎者也”のような古文のほかにどんな言語形式が使えるかという問題に直面する。」と述べている。（『論信達雅』、收羅新璋編『翻訳論集』、第942頁）また黄克武も次のように指摘している。「1890-1900年代、厳復が翻訳に従事した時、言語の面で主に4つの選択肢があった。1つは対句を尊ぶ駢文、1つは科挙試験用の八股文、1つは桐城派古文、1つは白話小説である。」（黄克武：『自由的所以然』、上海書店出版社、2000年、第71頁）。

してもらうために書いた解説である。講演の内容はより専門性が高く、解説が必要だとハックスリーは考えたほどであったが、それでもその専門的な内容は、講演という口頭形式によって表出できたのである。²⁷⁾しかし当時の中国語を顧みれば、演説体がまだ存在しなかった。19世紀以降来華した宣教師らは中国人助手の助けを借りて、「浅文理」（簡易な文語体）というスタイルで聖書を翻訳したり、布教文章を執筆したりした。「浅文理」というスタイルは不特定多数に対し、口頭による宣教も可能であった。しかし、モリソンが中国に渡来（1807）してからすぐ着手した聖書の中国語翻訳事業は、19世紀末になってほぼ百年経過したが、「浅文理」は結局中国の士大夫に受け入れられる文体にはならなかった。宣教師の失敗を目の当たりにした嚴復が、第一に考えなければならないのは「行遠」、つまり士大夫に受け入れられるかということである。

嚴復は、さらに「（雅馴を求めることは）行遠を期待するだけではなく、実は精緻な理論、微妙な言説は、漢以前の字法、句法を用いれば、伝達しやすく、近世の俗語では伝達し難い。（俗語を用いれば）往往にして意味を制限しなければならず、訳文は原文から大きく逸脱することになる。両者の損得を考えれば、（漢以前の難しい語句を用いるのも）やむを得ないことで、何も奇を衒うわけでもない！拙訳はよく難解の誹りを受けるが、実は原著の意味を明確に伝えるために過ぎない」と言っている。⁽⁹⁾この「雅」について述べている言説は、「訳例」になかったものであった。何が嚴復をそう書かせたのか。これには、桐城派古文の大家、吳汝綸氏の存在が大きい。以下では、嚴復と吳汝綸が交わした私信を手掛かりに、その間の事情を復元したい。

現存する吳汝綸が嚴復に送った最初の書信（日付1896年8月26日）に「貴訳の『天演論』はすでに脱稿されたであろう」とあるところを見れば、二人はそれまでにすでに書信のやりとりがあった。知り合いのきっかけや、翻訳問題について議論を始めた具体的な時期は不明だが、吳氏のこの書信に先立ち、嚴復は少なくとも二通、書信を送ったと推測される。吳の返信に、『天演論』の翻訳意義を理解しなかったのに、外国の農業書の翻訳を勧めたが、嚴復のさらなる説明で、自分の「迂闊な提言」を反省したとある。嚴復は、完成した『天演論』の初稿を友人に託し、吳汝綸に届けさせた。²⁸⁾吳汝綸の二通目の書信（日付1897年3月9日）に、

27) ハックスリーの講演は、2000人の聴衆を相手に行ったとされる。拡声機器のない時代で肉声をオーディエンス全員に届けるのは無理だろう。講演原稿を事前に印刷し、聴衆に配布すると考えられる。沈国威「赫胥黎の Evolution 與嚴復的“天演”」（『亞洲概念史研究』第7巻、2021年6月、第9-62頁）参照。

28) 吳汝綸は西洋の言語を解せず、科学の知識もない。嚴復が期待したのは文章規範に関する吳汝綸の助言であろう。沈国威『一名之立旬月踟躕』第8章を参照。

『天演論』に対する高い評価を書いている。同時に次のような感想を述べた。「もしご自分で著述をされるならば、思いのままに筆を走らせることができるが、ハックスリーの本を翻訳するという大義名分の下であれば、訳文に引用された古の書物や故事は、いずれも原著に用いられた西洋のものそのままのほうが適当であろう。中国のものに改める必要はないのではないか。というのは、中国の事跡や人物など、ハックスリー氏はもとより知るはずがないからである。翻訳法としては、東晋や南北朝の名流が仏典を翻訳した時の方法が良いであろう。その翻訳を中国の学者の著述と比べると、文章の体裁が明らかに異なり、形に適っているように思える。これは貴訳においては些細なことで、また『訳例』の中でも説明されていることではあるが、やはり原著のままのほうが優美である」と助言した。²⁹⁾つまり呉汝綸は嚴復の訳文において何が何でも原著の人物、事蹟を中国のそれに置き換えることは、必ずしも効果的ではないと指摘している。仏典の翻訳では異国情緒がむしろ重要な要素として活用されていた。プロテスタント宣教師、例えばモリソン (R. Morrison, 馬礼遜、1782~1834) やトーム (R. Thom, 羅伯聃、1807~1846) らは、その訳書において意図的に西洋の伝説、事蹟、人物を中国のものに取り替える試みが見られる。³⁰⁾このような方法は、読者に親しみを与え、未知のものへの抵抗感を和らげる効果があるが、翻訳の本質を蔑ろにする恐れがある。呉汝綸は仏典翻訳を手本として推奨したのである。

嚴復は、呉汝綸の助言を取り入れ、訳文を修正し、次のように報告した。「拙訳『天演論』は最近添削し終えた。自説の多くは訳文から削除か、または文末の案語に入れた。晋以降の仏典翻訳の方法をすべて採り入れることはできなかったが、前より良くなった。」³¹⁾同じ書信で嚴復は、序文の執筆を快諾した呉氏にお礼の言葉も述べた。呉汝綸は、さらに1898年3月20日付で嚴復に書信を送った。書信の中で呉汝綸は嚴復の訂正に満足の意を示し、訳文は「義例精審」と称えた。但し同時に prolegomena の訳語で用いた「卮言」は陳腐な語で、(嚴復の友人夏曾佑が提案した)「懸疏」も仏教の意味合いが強いと指摘し、各小節の題目もまだ十分ではないと述べた。なお、この書信によれば、嚴復はすでに同3月11日までに呉氏の序文を受け

29) 呉汝綸「若自為一書，則可縱意馳騁；若以訳赫氏之書為名，則篇中所引古書古事，皆宜以元書所稱西方者為當，似不必改用中國人語。以中事中人，固非赫氏所及知，法宜如晋宋名流所訳仏書，與中儒著述，显分体制，似為入式。此在大著雖為小節，又已見之例言，然究不若純用元書之為尤美」[「呉汝綸致嚴復書(二)」、丁酉二月初七日(1897年3月9日)、『嚴復集』第5冊、第1560頁。

30) 内田慶市『近代における東西言語文化接触の研究』、大阪：関西大学出版部、2001年、第145-164頁。

31) 「拙訳『天演論』近已刪改就緒，其參引已説多者，皆削歸後案而張皇之，雖未能悉用晋唐名流訳義例，而似較前為優」[『嚴復集』第3冊、第520頁。「嚴復致呉汝綸函」、1897年11月9日(旧曆十月十五日)。

取ったことが分かる。³²⁾この序文こそ、「訳例言」に大きな影響を与えたもので、換言すれば「訳例言」は、一連の書信と呉氏の序文を踏まえ、執筆したのである。

それでは、呉氏の序文を見てみよう。³³⁾序文では、呉汝綸はまず「文」と「道」の関係を取り上げ、「おおよそ我が聖賢の教えは、上のものは道理が優れ、文章も完璧である。その次は、道理はやや劣るが、文章には久しく伝わるだけの力がある。ただ文章が不足していれば、その道理もそれだけで存在することはできない」と指摘している。³⁴⁾道を載せる重責に耐えられない文章は、無用のものである。このような「文以載道」という思想は、当時の中国では支配的な地位にあった。呉汝綸は、続けて周の時代の末期、學術の流派が多く現れ、その文章は喜ばしいものが多いが、その文体は大まかに言えば「集録」と「撰著」の二種類しかないとし、いわゆる「集録」は、各章が各々独立し、相繋がらないもので、『詩経』『尚書』はこのタイプの最も早い時期の作品である。一方、「撰著」とは、文章が1つの主題をめぐって展開するもので（建立一幹、枝葉扶疏）、『周易』『春秋』が最初の例となる。漢の時代は撰著が多く、最も名前が知られたものは司馬遷の『史記』と揚雄の『太玄』である。前者は『春秋』、後者は『周易』をそれぞれ模倣している。この二つの書物には、大まかなストーリーがあり、文章はそれをめぐって展開する。しかし唐の中葉になると、韓愈が『詩経』『尚書』を推奨し、世の中の風潮も集録タイプのものを好むようになった。宋代もその傾向が続いた。故に唐宋以降、集録の書物が多くなり、撰著の文体は見られなくなった。たまにあって文章は劣り、喜ばれなかった。一方、最近中国に伝わった西洋の書物の多くは、1つの主題をめぐって展開するもので、これは漢代の撰著と合致するところがあった。呉汝綸は、撰著は「宏大叙事」という体系立てで事象を詳細に述べ立てる目的に最も適しており、撰著の文体は同時に學術、特に西洋科学の体系性と密接な関係があると考えていたようだが、撰著であろうが集録であろうが、文章の体裁上、相違はあるが、結局のところ文章力がものを言うのと、呉汝綸が指摘している。人々は、西洋の学問はいずれも中国人が知らないもので、民智を啓くのに、最も良い方法は翻訳を行うことであると言っているが、しかし惜しいことに、現下、「我が国の翻訳者は、大抵文章が劣り、西洋の知識を伝えるには力不足である」というのが現状であり、読書人が良しとするものは、「集録」でもなければ、「撰著」でもなく、時文や公牘、説部で、つまり八股文、役所の公文書（例えば樊増祥らが手がけた判決文、筆者）と小説等の雑文、筆記、逸聞などで

32) 呉汝綸「致嚴復書三」、『嚴復集』第5冊、第1561-1562頁。序文の掲載日付は、「戊戌孟夏」（5月20日 - 6月19日）であったが、2月中に完成したことになる。

33) 呉汝綸「『天演論』呉序」、『嚴復集』第5冊、第1317頁。

34) 呉汝綸「『天演論』呉序」、『嚴復集』第5冊、第1318頁。

ある。このようなもの以外は、当時の中国には文章と言えるものが殆どない。西洋書の中には多くの新知識が含まれているが、しかし時文、公牘、説部のような文体は西洋書翻訳の大任が担えない。このような文体で翻訳したとしても、有識者の興味関心を引き起こせないというのが呉氏の主張であった。呉汝綸は、さらに次のように指摘している。漢、晋の時代に仏教が中国に伝来した時、中国の学問はまだ衰えておらず、才能のある人が口述者の訳文を筆録するが、口述と筆録の両者が切磋琢磨し、仏典の翻訳は独特の文体となり得た。呉氏は、ハックスリーの学説と仏教にどのような関係があるかは不明だが、その文章を訳出し、司馬遷、揚雄と比肩することは並大抵のことではない、それどころか唐宋の文章と同列に語るのも容易なことではないと指摘している。³⁵⁾呉汝綸は序文の中で「嚴復の訳文は、晩周諸子の文章と優劣がつけ難い」、「我が国で西洋書の翻訳を始めて以来、嚴復の翻訳を超えたものはない。嚴復のような文章であれば、彼と翻訳のことを語ってもよい」と嚴復の訳文を褒め称えている。しかし呉汝綸は嚴復の訳文に最大級の賛辞を送りながらも、同時にまた「しかしながら私はまた困惑もしている。というのは、書物はその時の読者に相応しなければならない。昨今の人々は、時文、公用文、説話を学問と考えているのに、嚴復は晩周諸子の文章と優劣がつけられない、不朽の文章を世に送ろうとしている。両者は全く相容れないと危惧している」と指摘している。³⁶⁾呉汝綸は、西洋の新しい知識の内容と嚴復の翻訳文の形式、当時の読者の閲読趣味の間に大きなギャップが存在していることをはっきりと意識している。このようなギャップは必然的に新知識の普及に悪影響を与える。時代の読者を伝統的な文体に適應させるか、それとも文体を時代の読者に合わせさせるかという問題において呉汝綸は、「待たなければならない。そのような人物を得られれば、民衆の啓蒙も期待できる」と考えていた。³⁷⁾

『天演論』の雅馴は、当時の読者の閲読趣味を満たし、成功を取めたが、しかし「建立一幹、枝葉扶疏」という文体が完成したわけではない。「雅馴」は、その後の『原富』の翻訳まで尾を引いていた。嚴復は『天演論』の手稿を完成した頃（1896年10月までに）、すでに『原富』の翻訳を始めた。³⁸⁾原著は、専門性の高い大著であり、経済学の専門用語のみならず、学術の文章に用いる語句が大量に使用されている。学術用語の大量使用は、必然的に翻訳文の文体に影響を与え、『原富』はもはや『天演論』のような格調高いリズムを再現することができない。

35) 呉汝綸「『天演論』呉序」、『嚴復集』第5冊、第1317頁。

36) 『呉汝綸全集三』、黄山書社、2002年、第181頁。

37) 呉汝綸『天演論』「呉序」、『嚴復集』第5冊、第1319頁。

38) 皮後録によれば1896年10月30日までに原書の37頁まで訳了した。氏著『嚴復評伝』、南京大学出版社、2006年、第414-420頁。

嚴復は、「この訳は『天演論』と異なり、着手する時、原著の言葉を完全に理解した。順番を変えたり、内容を追加したりしたことはない」と言っている。³⁹⁾このような翻訳の変化は、原著の内容によるところが大きいであろう。嚴復は大いに困惑していた。早くも1898年春、嚴復は次々に『原富』の訳文を呉汝綸に送り、『天演論』のように助言、添削してくれるよう、再三にわたって呉汝綸に懇願した。呉汝綸も嚴復の「虚懐謙挹，勤勉下問，不自滿假」という謙虚な態度に心を動かされたが、自分も『原富』のような専門書には歯が立たなかったのである。呉汝綸は西暦1899年3月11日付（己亥年正月三十日）で、嚴復に次のような書信を送った。

スミス氏のこの本は、正に事の道理を極め、その様子を描き出している。あなたの立派な翻訳でその全容を読者に示し得た。今の世の中は、あなたに追いつける者などはいない。玉稿を頑張って拝読したが、内容が難しいので、勉強になったとはとても言えない。訂正を加えた部分は、文言の推敲と独断偏見に過ぎない。あなたが何度も手紙で校正するようにと言うので、俗習のように遠慮を偽ってはご高誼に背いてしまう。不適當とは百も承知だが、謬見でも申し上げないとかえって不愉快にさせると危惧した。私は最近益々老いて動作も目も鈍くなった。朝のことは晩には忘れ八十、九十のようだ。智力も衰え、何もできなくなった。⁴⁰⁾

呉汝綸は、自分が貢献できるのは「語句の推敲（字句間眇小得失）」であり、「至らぬ私見（愚心所識一孔之明）」に過ぎず、ご参考までと言っている。しかし呉汝綸は、「しかしながら『古文辞類纂』は二千年の優れた文章と申し添えておく。六経以降の第一級の書物と考えている。これからきっと西洋の学問が盛んになり、中国の夥しい数の書物はすべて廃棄すべきだと思うが、この書だけ残れば、いにしへの文章が延々と続き、絶えることはないだろう。故に資金を集め、石印出版をし、さらに校勘記を二巻に纏めた。聞き漏れの一助にと思い、清書して

39) 嚴復「是訳『天演論』不同，下筆之頃，雖于全節文理，不能不融會貫通為之，然于辭義之間，無所顛倒附益。」「訳斯氏『計学』例言」『嚴復集』第1冊、第101頁。

40) 「斯密氏此書，洵能窮極事理，鑿刻物態，得我公雄筆為之，追幽鑿險，扶摘奧蹟，真足達難顯之情，今世蓋無能與我公上下追逐者也。謹力疾拜讀一過，于此書深微，未敢云有少得，所妄加檢校者，不過字句間眇小得失。又止一人之私見。徒以我公數致書，屬為勘校，不敢稍涉世俗，上負誣謬高誼。知無當于万一也。獨恐不參謬見，反令公意不快爾。某近益老鈍，手蹇眼滯，朝記暮忘，竟諄諄若八九十。心則久成廢井，無可自力。」嚴復：「呉汝綸致嚴復書五」、『嚴復集』第5冊、第1563頁。

から差し上げる」と筆を思わぬ方向に進めた。⁴¹⁾『古文辞類纂』(1779刊)は、桐城古文派の重鎮、姚鼐が編纂した文集である。ここでの言及は、聊か唐突の感が否めない。しかし呉汝綸による『天演論』の序文と併せて読めば、その真意を理解するのは難しくない。つまり『古文辞類纂』は集録タイプ書物の最高峰であり、西洋式の宏大叙事でもこのような書物によって文章力を養っておかなければならないと呉汝綸は考えたのである。⁴²⁾

嚴復は呉汝綸のこの手紙を受け取るやすぐ返信した。⁴³⁾嚴復の手紙は残っていないので、呉汝綸の返信からその内容を推測するよりしかたないが、嚴復は呉汝綸の真意を誤解したようである。嚴復の誤解を解消するため、呉汝綸は、二月二十三日付(西洋暦1899年4月3日)で再度嚴復に私信を送った。⁴⁴⁾呉氏の書信から見れば、嚴復は呉氏が『古文辞類纂』を推奨したことに対して自分の文章は、しかるべき水準に達していない、つまり雅馴に欠けていることを呉氏が暗示していると誤解していた。嚴復の誤解に対し、呉汝綸は二月二十三日付の返信の中で「翻訳なされた『計学』を拝読する際、往々にして異議を挟むが、要を得ていないと百も承知している。貴殿は来書において謙虚な態度で再三愚見を求められた。私は自分の力量も顧みず、恥ずかしい限りである」と釈明し、また「前便は意見を的確に伝えることができず、言葉遣いも適当ではない」と詫びた。⁴⁵⁾ 呉汝綸は自分の真意は、「中国の書物に雑多なものが多く、広く受け入れられない」ということであり、西洋の学問が伝わってから、人々は中国の典

41) 呉汝綸「因思『古文辞類纂』一書，二千年高文，略具于此，以為六經後之第一書，此後必應改習西学。中学浩如烟海之書，行当廢去，独留此書，可令周孔遺文，綿延不絕。故決計糾資石印，更為校勘記二卷，稍益于未聞，俟繕写再呈請是正」『呉汝綸致嚴復書五』、『嚴復集』第5冊、第1563頁。

42) 呉汝綸「撰著之與集録，其体雖變，其要于文之能工。一而已。」「『天演論』呉序」『嚴復集』第5冊、第1318頁。

43) 二人の書簡往復は次のようになっている。呉汝綸は正月三十日付(西洋暦1899.3.11)で嚴復に書簡を送り、それを受け取った嚴復は二月七日付(西洋暦1899.3.18)で返信をした。当時の通信事情を考えればほぼ即時返信したのであろう。呉汝綸は、嚴復の返信を受け取り、しばらくした後、二月二十三日付で再度嚴復に書簡を送り、自分の真意を説明し、嚴復の疑問に答えた。

44) 嚴復「呉汝綸致嚴復書六」、『嚴復集』第5冊、第1564-1565頁。以下の引用は、この書簡より。

45) 「以校読尊著『計学』，往往妄貢疑議，誠知無当万一，乃來書反復齒及，若開之使繼續妄言，誠謙挹不自滿假之盛心，折節下問，以受尽言，然適形下走之盲陋不自量，益增慚慙。(中略)某前書未能自達所見，語輒過当。本意謂中国書籍猥雜，多不足行遠。(中略)世人乃欲編造俚文，以便初学。此廢棄中学之漸，某所私憂而大恐者也。(中略)欧洲文字，與吾国絕殊，訳之似宜別創体制，如六朝人之訳仏書，其体全是特創。今不但宜棄用中文，并亦不宜襲用仏書，窃謂以執事雄筆，必可自我作古。又妄意彼書固自有体制，或易其辞而仍用其体似亦可也。不通西文，不敢意定，独中国諸書無可倣效耳。(中略)鄙意与其傷潔，毋寧失真。凡瑣屑不足道之事，不記何傷。若名之為文，而俚俗鄙淺，薦紳所不道，此則昔之知言者無不懸為戒律。(中略)如今時鴉片館等，此自難入文，削之似不為過。儻令為林文忠作伝，則燒鴉片一事固当大書特書，但必叙明原委。」「『嚴復集』第5冊、第1564-1565頁。

籍を読む余裕がなくなった。「世の中の人たちは、低俗な文章を作り、初習者に便宜を図ろうとした。そのため中国の学問は徐々に廃れていく。これが私の大いに怖れることだ」と警鐘を鳴らすことであった。呉汝綸は「欧洲の言葉は我が国と根本的に異なるはずだ。翻訳はそのための文体を打ち立てるが良いだろう。六朝の人が仏典を翻訳する時、その文体はすべて特別に作ったものである」と仏教翻訳を引き合いに出して、現在の西洋の学問の受容は、「中国語既有的ものを踏襲すべきではないのみならず、仏典をも援用すべきではない」と言い、謙虚に自分が「西洋の言葉に通じず、臆測できない」が、「西洋の文章に固より独自の体裁を持つだろう。語句を変え、その文体をそのまま援用することも良さそうである。但し手本として倣うことのできる中国の書物は、皆無だろう」と推測していた。呉汝綸は『天演論』序文にある「期待論」を一步前進させ、西洋の新知識を採り入れるため、斬新な文体を積極的に作る必要があると考えている。しかし、六朝時代の仏典翻訳の時は、「中国の学問はまだ衰えておらず、有能な人が（口述された訳文を）筆録し、文章を首尾一貫に整え、故にその文章は自ら一類を為す」ことができたが、「西洋の書物が我が国に流入してきた昨今、ちょうど我々の学問が衰微していた時」であり、⁴⁶⁾19世紀末、西洋の新しい学問の浸食で、中国の学問はすっかり衰えてしまった。加えて、新文体の創出は「優れた文章家でなければ容易いことではない」ため、⁴⁷⁾呉汝綸は「思うにあなたの力量であれば、必ずや歴史に残るような文章を書ける」とその希望を嚴復に託したのである。しかし、嚴復の孤軍奮闘は、古文派の衰退を挽回することはできなかった。『時務報』『清議報』の文体と日本語からの新語の挟み撃ちに遭った嚴復は、その行末も予見しがたいものではなかった。

このように嚴復はどのようにすれば、「達辞」と「行遠」の調和が実現できるかについて最後まで悪戦苦闘していた。

5 翻訳と小学：なぜ漢以前の字法が必要か

前節では、文章規範と読者の受容可能性という視点から「雅」について分析してみた。しかし「雅」の役割は、それだけではない。嚴復は、「訳例言」で「(雅馴)これは行遠のためだけではない。実は精緻な理論、微妙な言説は、漢以前の字法、句法を用いれば、伝達しやすく、近世の俗語では伝達し難い。(俗語を用いれば)往往にして意味を制限しなければならず、訳文は原文から大きく逸脱することになる。両者の損得を考えれば、(難しい語句を用いるのも)

46) 「今西書之流入吾国，適當吾文学靡弊之時，(中略)往者积氏之入中国，中学未衰，能者筆受，前後相望，顧其文自為一類。」『嚴復集』第5冊、第1318頁。

47) 「特建新類，非大手筆不易辨也。」『嚴復集』第5冊、第1565頁。

やむを得ないことで、何も奇を衒うわけでもない！」と言っている。(9) これまで、この発言について解釈が必ずしも十分ではないように思われる。嚴復の真意はどこにあるだろうか。

前節で述べたように、雅馴は「行遠」の必須条件である。中国の文章界では、漢以前の文章が模範であり、漢以降の文章は、劣化の一途を辿っていたとされていた。吳汝綸は、「唐の中葉になると、韓愈が『詩経』『尚書』を推奨し、世の中の風潮も（撰著より）集録タイプの文章を好むようになった」と言って、暗に韓愈が悪しき手本を示したと非難している。章太炎も唐宋の文章をよしとしない。⁴⁸⁾嚴復は、「中国の文章は、莫若司馬遷、韓愈より美しいものはない」と言い、⁴⁹⁾司馬遷と共に韓愈の文章も高く評価していたが、吳汝綸の韓愈の「集録」より司馬遷の「撰著」文体のほうが大部の西洋書の翻訳によいとの助言もあって、漢以前の「句法（文章作法）」を追求したのも頷ける。一方、漢以前の「字法」は何を指しているのか。1つは人類祖語（世界祖語とも）の問題で、いま1つは、中国語と英語の語彙数の格差であると考えられる。

まず、人類祖語について見よう。聖書には、バベル塔の言い伝えがあり、神によって別々の言語に攪乱させられる前に人類は、共通の言語を持ち、その時は人間同士は互いに言葉が通じ合っていたのだとされる。19世紀の歴史比較言語学の進歩は、人類祖語の想像を膨らませ、西洋の言語学学界では、一部の研究者は、人類祖語を発見することに宗教的な情熱を燃やしていた。嚴復もその影響を受けたようである。彼は、梁啓超と訳語について論争した時、次のように述べている。

おおよそ西洋の概念を翻訳する時、一番困難なのは、そのような概念は中国語にないか、或いはあっても訳者がそれを知らないことである。もし訳語を見つければ、何とかうまく収まる。自分において伝えることが出来、他人において理解できればことが足りる。訳語が通じないとの譏りを避ける必要はない。……要するに重大な概念を翻訳する時、常に語源を遡って、西洋の言葉の最も古い意味を考え、すべての派生義を求めた上で、中国語から同類の語を探求する。そうすればびったり合致するものが見つかる。⁵⁰⁾

48) 章太炎は「文章流別」で、韓、柳（宗元）の文章を「詰屈聱牙」と評している。『章太炎全集 演講集上』、上海人民出版社、2015年、第468頁。

49) 嚴復「中国文之美者、莫若司馬遷、韓愈。」『與梁啓超書二』、『嚴復集』第3冊、第516頁。

50) 嚴復「大抵取訳西学名義、最患其理想本為中国所無、或有之而為訳者所未経見。若既已得之、則自有法想。在己能達、在人能喻、足矣、不能避不通之譏也。……盖翻艱大名義、常須沿流討源、取西字最古太初之義而思之、又当広搜一切引伸之意、而後回觀中文、考其相類、則往往有得、且一合而不易離。」『與梁啓超書二』、『嚴復集』第3冊、第518-519頁。

この発言は、嚴復の訳語観を端的に表している。嚴復は、西洋の一部の概念は元々中国にないものである。あったとしても一般の人はそれを知らない。そのような概念を表すには、新たに訳語を創作するか、或いは夥しい典籍から訳語となり得るものを探さなければならない。場合によっては、訳語と原語は等価的なものになれず、相異は完全に解消できない。しかしそれでも大したことはない。不通と揶揄されても気にしない。というのは、訳語は使用する過程で意味が徐々に調整され、原語と一致するようになるということである。しかしこれは一般語彙の場合である。嚴復が「艱大名義」と呼ぶ一部の重要な語は、異なる様子を呈している。筆者はこのような語を「大詞」と称するが、その訳語の選定には、嚴復は「沿流討源」をする必要があると言っており、最古の意味を見つければ、言語が異なっても意味的に対応する可能性が大だと主張している。そして彼は「権利」を例に次のような趣旨を述べている。

- 「権利」で right を翻訳することは無理である。漢籍にある「権利」は権と力によって利益を得ることで、right にある生まれながら享受すべき利益の含意とは相容れない。
- 『漢書』にある「職」は正に right の意味にほかない。但し「職」は、すでに「職責」という形で duty の訳語になっているので使えない。
- 『詩経』『管子』などにある「直」は、「職」と訓むことができる。
- 「直」は、rightに通じるところがある。「直」は「職」に通じ、あるべき役割の意で、right は、物事の正しいことから人間が生まれながら享受すべきことの意となる。right line, right angle を「直線」「直角」と訳す所以である。
- 「直」の本義は、長い間忘れたので、再度際立たせる必要がある。⁵¹⁾

嚴復はさらに『群学肄言』の「訳余贅語」の中で、

かつて六書の意味を考察するに、中国の古人の説は、西洋の学問に合致することを知る。なぜそのように言えるか。西洋の学問では社会についての定義は、人々が集まり、法律に拘束されているものを言う。それに対して中国の字書では、「邑」、人々の集まる所、口に従い、区域がある。「阌」に従い、法律がある。国については、国土があり、それを守る国民があることを言う。対して中国の字書では、「国」は、古文字では「或」で、「一」に従い、土地である。「口」に従い、戈を持って守ることである。これらを見れば、

51) 嚴復「與梁啓超書二」、『嚴復集』第3冊、第518-519頁。沈国威「一名之立旬月踟躕」第2章参照。

中国語の漢字と西洋の意味が暗黙裏に合致することが分かる。⁵²⁾

と述べて、一部の西洋の概念の定義、例えば「社会：組織された民衆」；「国：土地と人民によって構成された」などは、漢字の構成と暗に合致していると指摘している。嚴復は、また『英文漢詁』の中で、次のように述べている。

英語は昔のドイツ語に似ている。故に I は昔 Ic であり、また Ich ともなる。西洋言語の人称代名詞は、昔は中国と同じである。例えば I は、中国語の「台」であり、ラテン語では Ego で、「我」である。古英語の Thou は you で、フランス語の vous, tu などは、みな中国語の「汝」「若」に近い。第三人称の he, it, they やフランス語の il などは中国語の「伊」「他」と同源である。(案：中国語と西洋言語では古語が同じものが多い。西洋人のエドキンスが言っていることの多くは私が言っていることと合致する。ヨーロッパの人とアジアの人は昔同種であったことが分かる。こじつけではない。)⁵³⁾

嚴復は『政治講義』の中でさらにこうも言っている。

中国語は、古い発音を求めれば、西洋の言葉と同じものが少なくない。例えば西洋では mola, mill と言い、私たちは、「磨」と言う、西洋は ear, arare と言い、私たちは「犁」と言う、西洋は father, mother, pa, ma と言い、私たちは、父、母、爸、媽と言う、西洋は Khan, King と言い、私たちは「君」と言う、西洋は Zeus, Dieu と言い、私たちは「帝」と言う、西洋は terre と言い、私たちは「地」と言う、甚だしきは、西洋は judge, jus と言い、私たちは「則」「準」と言う、西洋は rex, ricas と言い、私たちは「理」「律」と言う。このような例は枚挙に暇ない。ことばの根拠がある以上、東西は同源ではないと言い切れるか。⁵⁴⁾

52) 嚴復「嘗考六書文義，而知古人之說與西學合。何以言之？西學社會之界說曰：民聚而有部勒〔東學稱組織〕祈向者，曰社會。而字書曰：邑，人聚會之稱也。从口，有區域也，从卩，有法度也。西學國之界說曰：有土地之區域，而其民任戰守者曰國。而字書曰：國，古文或，从一，地也，从口，以戈守之。觀此可知中西字義之冥合矣。』『嚴復集』第1冊、第126頁。[]の中は割り注である。

53) 嚴復「英文古似德文，故 I 字古作 Ic，又作 Ich，西文稱謂，當隆古時，與中國同，如 I 則中國之台也，拉丁文作 Ego，我也；thou 之與 you，與法文之 vous, tu 皆在中文汝若之間；而第三身之 he, it, they，與法之 il 等，尤與吾文之伊他同原。(案中西古語多同，西人如艾約瑟等所言多與鄙人合者，可知歐亞之民，古為同種，非傳會也。)」『英文漢詁』商務印書館1933年版、第34頁。

54) 嚴復「則支那之語，求諸古音，其與西語同者，正復不少。如西云 mola, mill, 吾則云磨。西云 ear, 〃

主張はもはやこじつけの域に入っている。異なる言語には同じ概念はあり得るが、同じ命名の根拠がある必要がない。巖復は、いわゆる「西学中源説」には賛同していないが、このような作業によって、隠れていた東西の意味関係を浮き彫りにすることができるかと信じていたようである。しかし、言語類型学の知見によれば、この種の偶然の相似性には、何の意味もない。

次に中英間の語彙の量的格差の問題を取り上げよう。

すでに見たように巖復は、「訳例言」で原著の「精理微言」には漢以前の「字法」では対処できるが、「近世世俗文字」では対処できないと指摘している。(9) この2年前の「訳例」になかった主張の形成は、『原富』の翻訳実践に大いに影響されたものである。巖復が断っているように『原富』と『天演論』の違いは、翻案ではなく厳密な翻訳であった点にある。文章表現だけではなく、個々の語句にもこだわる必要がある。『原富』には専門用語、抽象語彙、固有名詞、度量衡を含む西洋の器物の名称がふんだんに使用されている。既存の語ではとても対処できそうにないことは明白である。『天演論』における「例えば物競、天擇、儲能、效実などは、いずれも私がはじめて作ったものである。1つの訳語を確立するには長い時間をかけた。(新語を乱造する)罪の深さを十分承知しているが、志を知ってほしい」(13)という達成感と不安の混じった心境は、『原富』では、むしろ困惑に転じた。巖復は、1889年初頭呉汝綸に送った書信(1899年3月17日付)の中で、「文章に雅馴を求めようとするが、その際、由緒の分からない言葉を排除しなければならない。勝手に(原著の語句を)変えれば真実を失うし、そのまま使うと訳文をだめにしかねない。誠に難しい」と用語上の苦悩を吐露した。⁵⁵⁾つまり西洋の専門書を翻訳するには、中国の典籍にない新語・術語を使用せざるを得ない。しかしこのような新語・術語は、「闖入之字(由緒不明な語)」と見なされ、訳文の雅馴に悪影響を与える。実に両立できない事である。巖復が返信の中で見せた困惑に対し、呉汝綸は、「私の意見は、文章の品位を傷つけるくらいなら、むしろ原著から逸れることを選ぶ。取るに足らぬ些細な事は、書き記さなくても問題ない。文章という大義名分の下、粗野で浅はかなものを書くならば地位の高い人に見放される。これは昔から見識のある人にとって不変の戒律である」と助言した。しかし同時にまた「今の鴉片窟のごときは、自ずから文章に入りにくく、削除しても問題ないが、しかし林則徐のために伝記を執筆するならば、鴉片を焼き捨てることは特筆

↘arare, 吾則云犁。西云 father, mother, pa, ma, 吾云父、母、爸、媽。西云 Khan, King, 吾云君。西云 Zeus, Dieu, 吾云帝。西云 terre, 吾云地。甚至西云 judge, jus, 吾云則, 云準。西云 rex, ricas, 吾云理, 云律。諸如此類, 觸處而遇。果使語言可凭, 安見東黃西白不出同源?」「政治講義」、『巖復集』第5冊、第1246頁。

55)「行文欲求爾雅, 有不可闖入之字, 改竄則失真, 因仍則傷潔, 此誠難事。」「巖復集』第5冊、第1564頁。

塵	榛	檮	鞞	罽	柰	蠱	碓	庀	罇
酉	𪗇	𪗈	鬚	絢	儼	糗	莛	瘡	鎡
紕	狃	棋	嶺	𪗉	鉦	贖	鏡	饑	覲
孺	糈	緇	印	𪗊	𪗋	糞	侍	縑	繒
滯	𪗌	覘	闕	闕	𪗍	瘵	輶	𪗎	𪗏
𪗐	𪗑	𪗒	𪗓	𪗔	𪗕	糈	𪗖	𪗗	𪗘
𪗙	𪗚	𪗛	𪗜	𪗝	𪗞	𪗟	𪗠	𪗡	𪗢
𪗣	𪗤	𪗥	𪗦	𪗧	𪗨	𪗩	𪗪	𪗫	𪗬

大書すべきである。但し事の顛末を明確に述べなければならない」と指摘している。呉汝綸は、語句の選択は表現内容によって決まるものとし、嚴復の新語使用に理解を示した。このように「闕入之字」が忌諱される中、嚴復は目を漢以前の字に向けたのである。「訳例言」を執筆した1898年6月10日までに嚴復は原著を146頁ほど訳していたが、いわゆる漢以前の難解な字を多く使用している。印刷制約上のため、その一部を手書きで示しておく。⁵⁶⁾しかし、掲示した例字からも分かるように、嚴復が使用している漢以前の字は、「精理微言」の訳出に何ら貢献したこともなかった。「訳例言」では、嚴復は『天演論』の翻訳は「艱深文陋」との譏りを多く招くだろう。しかしこれは勉めて「顯」（つまり区別性）を追求したために過ぎず、そうせざるを得なかったと述べた。(9) また、訳語を選定することにおいて、無理矢理に拵えたとの批判を避けようと思っても無理であるとも言っている。(13) いずれも『原富』の翻訳によって増幅された思いに違いない。

嚴復は、1900年初頭に呉汝綸への信書の中で、「『原富』の翻訳はまた新しく四五冊訳了した。但し文章は益々どくて雑然としている。投げ出そうとも思ったほどだ。」とある。⁵⁷⁾文体と用語で行き詰まりを感じた嚴復は、翻訳自体を投げ出そうとしたのだが、最終的に原著の主要部分の翻訳を完成させた。『原富』が出版されてから、梁啓超は、賛辞を送りながらも、次のような否定的な意見を述べた。

56) 『原富』部甲、篇十、論業異而庸羸不同之故、第5-138頁。『新語往還——中日近代語言交渉史』の第167頁以下も参照されたい。

57) 嚴復『原富』拙稿、新者近又成四五冊、惟文字則愈益蕪蔓、殆有欲罷不能之意。」「與吳汝綸書(二)」、『嚴復集』第3冊、第522頁。『嚴復集』の編者は、この書信を1900年1月29日付としている。

我々が残念に思うのは、その文体があまりにも古風を追求し、わざと先秦の文体を模倣したことである。多くの中国古典を読んでいなければ、簡単には理解できない。文章界も革命しなければならないこと久しいが、欧米、日本などの国において、文体の変革は常に文明進展の程度に正比例している。ましてやこのような奥深い理論的な書物は、流ちょうでストレートな文体で翻訳しなければ、どうして若い学生らに理解させることができようか。著述、翻訳の仕事の目的は、文明の思想を国民に伝えることであり、深山に隠れた、不朽たる名誉を期待するものではない。文人の古い習慣であるが、賢者のために直言をばばかり、言わないことができない。⁵⁸⁾

自ら「文字則愈益蕪蔓，殆有欲罷不能」と考えていた訳文が、「太務淵雅」「刻意摹倣先秦文体。非多読古書之人。一翻殆難索解。」と評価されては、嚴復も恐縮しきっていたであろう。「淵雅」は嚴復が求め続けた文章の境地であったが、しかし『原富』の「淵雅」はとて『天演論』と同列に論じられるものではないことを、嚴復が誰よりも知っていたのである。梁啓超の非難に対し、嚴復は、「窃以謂文辞者，載理想之羽翼，而以達情感之音声也」と言っている。「理想」は、当時は idea の訳語であり、現在は「概念」と訳す。言葉は、概念の外殻である。嚴復はそれを「羽翼」と称しており、遠くまで届く意味合いが込められたであろう。嚴復は、精緻な概念には、粗末な言葉を用いては伝えられない。低俗な語句では美しい情感も表すことができない。中国の文章で最も美しいのは、司馬遷と韓愈である。彼らはともに文章は、簡潔、著者の感情に真実でなければならないと主張している。私の文章は、別に「淵雅」を求めものではなく、著者の感情に真実であればよい。あなたは、文体の変化は時代の文明進展の程度と正比例していると言っているが、中国の学術について言えば、戦国と隋唐の時代は「全盛而放大光明之世」で、文体もこの二つの時代を超えたものはない。また文章の道は、革命と何ら関係のないヨーロッパの文章を近代と古代とで比べても、進歩したのは、概念であり、学術である。「其情感之高妙，且不能比肩乎古人」である。法律、政治に関する文章に至っては、古今では大差がない。中国では仏教経文の文体だけがこれまでの文章と異なる。翻訳書を理解するには、まず術語を理解しなければならない。例えば翻訳者が術語の意味を理解せずに軽率に翻訳に取りかかれば、その訳書は読者に理解できるはずがないだろう。低俗な言葉ばかりを

58) 梁啓超「吾輩所犹有憾者。其文筆太務淵雅。刻意摹倣先秦文体。非多読古書之人。一翻殆難索解。夫文界之宜革命久矣。欧美日本諸国文体之变化。常與其文明程度成比例。況此等学理邃蹟之書。非以流暢銳達之筆行之。安能使学僮受其益乎。著訳之業。將以播文明思想于国民也。非為藏山不朽之名誉也。文人結習。吾不能為賢者諱矣。」「介紹新著 原富」、『新民叢報』第1号、1902年2月23日、第101-115頁。

使い、学識のない人にへつらうことは、文章の道に対する「凌遲（切り裂く）」であっても、「革命」ではない。私が翻訳する書物は、深奥な学理のあるもので、学童を満足させるものではなく、中国の典籍をたくさん読んだ人のためである。中国の古典を読まずして、私の翻訳書を読む人が理解できないのは私の責任ではなく、本人にある。西洋の書を翻訳するのは、全国民に文明の思想を伝えるためであるが、それは、内容に程度の深淺があり、一緒くたにしてはいけないと聊か感情的に反論した。

巖復は、さらに「深山に隠れた、不朽たる名誉を期待するとはとんでもない。苟も翻訳に従事する以上、原著の龐大さと意味の繊細さ、それを伝える文章としては、カゲロウのように朝晩一日の寿命であれば、それは新聞や雑誌の文章である。学者が避けなければならないところである。故に敢えて申すが、美妙的な調べは、すべての人の耳に同じく伝わるものではなく、形の美しいものは、世俗の目に混同するものではない。言葉の博大なものは、平凡な人の耳には届かない。人々に分かってもらいたくないのではなく、勢いできないことである。」とまで言い放っている。⁵⁹⁾居直りとも言える態度を取ったのである。

ほぼ同時期に巖復は商務印書館社長の張元濟への書信の中で「昨日、汪、楊両君に会い、みな『原富』の訳文を絶賛してくれたが、必ずしも文章の趣旨を理解していなかった。2人とも私がわざと難しい文章を書いたと不満げだったが、誠に悔しい！私は翻訳する際、極力分かりやすさ、明晰さ、読みやすさを追求して止まない。格好を付けて難解さを求める気は毛頭ない」と書いている。⁶⁰⁾『原富』が公刊された後、巖復は張元濟への書信の中でさらに「『新民叢報』は拙訳にかなり不満であった。文章表現に敬服と言っているが、わざと難しい文字を使っていることは適當ではないと言っている。これは正しくない。文章に難易の別がなく、あるのは精確のみ。この言葉を知っておかなければならないと訴えている。⁶¹⁾この時期の巖復は、難解への批判はかなり敏感であった。

巖復は、「いま諸君と科学の話をするのに、中国語を使うことは、正に職人が中国の旧式の道具を使い、時計を作るようなものである。その難しさは本人しか分からない。それでも、我慢して使いながら、(中国語を)修正改良していくよりほかはない」と中国語の粗雑さを自分

59) 巖復「慕藏山不朽之名譽，所不必也。苟然為之，言龐大意纖，使其文之行于時，若蜉蝣旦暮之已化。此報館之文章，亦大雅之所諱也。故曰：聲之吵者不可同于衆人之耳，形之美者不可混于世俗之目，辭之衍者不可回于庸夫之聽。非不欲其喻諸人人也，勢不可耳。」「與梁啓超書二」、『巖復集』第3冊、第517頁。

60) 巖復「與張元濟書六」、『巖復集』第3冊、第535頁。1900年10月9日付。

61) 巖復「『叢報』于拙作『原富』頗有微詞，然甚佩其語；(中略)其謂僕于文字刻意求古，亦未盡當；文無難易，惟其是，此語所當共知也。」「與張元濟書十四」(光緒廿八年正月卅、1902.3.9)、『巖復集』第3冊、第550-551頁。

の講演に集まった聴衆に訴えた。⁶²⁾1919年以降も嚴復は私信の中で、

北京大学の教員陳、胡らは言文一致（文白合一）を主張するのが北京で前から知られた。彼らは、西洋はそうだからと言っている。しかしながら、西洋はそれが出来るのは文字が言葉に合わせているからであって、中国はそれと違って、言葉が文字に合わせているだということを知らない。いま文字、言語が優美だと言えるのは、語彙が豊富だからである。（語彙が豊富であるならば）話すにしても書くにしても精緻、深遠な概念を伝え、奇異、綺麗なものを描写できるのである。⁶³⁾

と中国語の現状に不満を言っている。

英語の表現の緻密さ（「精理微言」）に対応するには、中国語の語彙が極端に不足していることは、実は嚴復だけの経験ではなく、その時代の翻訳者、ないし作者の誰もが実感していたところである。この問題を言語の進化過程の相違として最も力説するのは章太炎である。

章太炎は、曾広銓と協力してスペンサーの『進歩について』を訳出する。スペンサーは、言語の進化について次のように述べている。

言語の最低の形態は叫びである。叫びというのは、下等動物におけるように、単一の音を通じて或る観念全体を漠然と表現する。確かに、人間の言語がかつて専ら叫びから成り、それゆえ品詞の点で全く同質的であったという証拠はない。けれども、言語の原始的形態が名詞と動詞のみを含むことは確実である。こうした原始的言語を母胎として品詞が徐々に増加し、動詞は能動と受動に、名詞は抽象と具象に分かれ、法、時称、人称の区別、数や格の区別が生じ、助動詞、形容詞、副詞、代名詞、前置詞、冠詞が作られ、文明人が細かい意味上の違いを表わすために用いる品詞の属、類、種、異種が分出したが、そのいずれのうちにも、同質から異質への変化が現われている。また、英語が他の言語に勝るのは、主として、こうした機能の細分化が極めて広汎かつ完全に行なわれたためであるということも、ついでながら認められると思う。

62) 嚴復「今者不佞與諸公談說科学，而用本国文言，正似製鐘録人，而用中国旧之刀鋸錘鑿，製者之苦，惟个中人方能了然。然只能对付用之，一面修整改良，一面敬謹使用，無他術也。諸公務察此意。」「政治講義」、『嚴復集』第5冊、第1247頁。

63) 嚴復「北京大學陳、胡諸教員主張文白合一，在京久已聞之，彼之為此，意謂西國然也。不知西國為此，乃以語言合之文字，而彼則反是，以文字合之語言。今夫文字語言之所以為優美者，以其名辭富有，著之手口，有以導達要妙精深之理想，狀寫奇異美麗之物態耳。」「與熊純如信83」、『嚴復集』第3冊、第699頁。

言語の発達を辿り得る第二の道は、類似の意味を持つ単語の分化である。言語学が夙に明らかにしたところでは、あらゆる言語における単語は、祖先の共通な語群に分類することが出来る。広範囲なクラスの事物ないし行動に対して無差別に用いられていた元来の名称は、やがて分化してクラスの主要部分を示すようになる。最初の語根から生じたこれらいくつかの名称は、さらに分化した他の名称の源になる。やがて、いっそう小さな違いを表わす派生語や複合名辞を作るシステムティックな方法が生じ、これに助けられて、結局、不案内な人には共通の起源を有することが信じられないほど音も意味も全く異質な一群の単語が発達する。その間に、他の語根からも別個の語群が展開し、約六万あるいはそれ以上の異なった単語を持ち、それだけの数の異なった対象、性質、行為を表わす言語が生ずるに至るのである。⁶⁴⁾

スペンサーの主張を要約すれば次のようになるであろう。言語は人間の認知力の発達に従い、総合から分析へと進化していく。語彙が派生と複合の形で増加するのがそのためである。(進化の結果) 1つの言語は、おおよそ6万、或いはそれ以上の語が形成され、異なる対象、性質、行為を言い分けられるようになる。スペンサーは「人間の言語がかつて専ら叫びから成り、それゆえ品詞の点で全く同質的であったという証拠はない」と言っているが、幼児の言語発達を観察すれば、数少ない「叫び」という総合的な状態から少しずつ語、文へと分かれていくという言語進化説に強い説得力を章太炎が感じた。曾、章による『進歩について』の翻訳は、巖復の『天演論』とほぼ同時期であり、訳者はまた巖復と同じく訳語の問題に遭遇したのである。章太炎は翻訳を通じて痛感した中国語の語彙の貧弱さを進化の遅れに帰した。上記のスペンサーの趣旨を章太炎は、感想を交じえながら次のように訳出している。

およそ言語文字は複雑に変化するほどその教化はより文明となる。英語が、ヨーロッパの事物を表現できるのはそのためである。いま英語の語彙は数が多く、大体6万語余りあり、それぞれ意味を持ち、互いに区別されて、決して混乱しない。(人類に)文字が出来てから、最も広大である。⁶⁵⁾

64) 『世界の名著 36 コント スペンサー』(清水禮子訳)、中央公論社、1970年、第410-411頁。

65) 章太炎「大抵語言文字之變愈繁，其教化亦愈文明，英國所以表西海者，其以此夫。(中略)今英語大數，無慮六萬余言，言各成義，不相凌雜。蓋自書契之作，斯爲最廣矣。』『章太炎全集 訳文集』、第9-10頁。訳文の連載は、『昌言報』第1号、1898年からである。

章太炎は、その後に執筆した『尙書』『訂文』にスペンサーの主張を多く取り入れた。「訂文」では、章太炎は次のように述べている。

いま英語は語彙数が最も多く、総数は6万語である。(これはスペンサーの当時〔初版は、1858年〕の説である)語はそれぞれ意味を持ち、互いに峻別される。⁶⁶⁾

つまり、英語は他の言語に比べれば、語彙数が最も多い。それだけでなく、「言各成義，不相凌雜」という理想的な状態に発達した。一方、中国語の語彙について、章太炎は次のように述べている。

『史籀』という書物が作られたとき9千字があった。いい加減に作られたのではなく、その文字があれば必ずその言葉がある。秦の大篆小篆はそれを整理し、『凡将』などの書物が続けて作られ、許慎の時にまた9千字である。許慎以降も増え続け、『玉篇』から『集韻』に至っては3万字を下らない。いい加減に作られたのではなく、その文字があれば必ずその言葉がある。しかし北宋が減びてから、人々は益々に怠惰になる。正式な文字は増えず、増えたのは無学な輩による俗字である。増えないのと同じである。従って口語に蓄積された語は千字くらいで、公文書には2千字前後、立派な書物に用いられる語は3千字で事足りて、王朝を頌える書物には4千字で十分である。他の文字は廢物と見られた。国を治め、人民を統治するに2千字だけであった。中国の広大さ、事務の多さからすれば、為政者がこれだけの語で政治を行う以上、混乱も避けられない。⁶⁷⁾

章太炎は、『玉篇』（顧野王、519～581）、『集韻』（1039）まで中国語の語彙も順調に増加していたが、北宋以降、人々は怠惰になり、語彙の増加も停滞した。現状としては、口頭では2千字、公文書の類いではせいぜい2千字が用いられていたと考えていた。2字1語のケースも

66) 章太炎「今英語最数，無慮六万言。〔斯氏道當時語。〕言各成義，不相陵越。自東西之有書契，莫繁是者，故足以表西海。」『章太炎全集・尙書初刻本、尙書重訂本、檢論』、第45頁。

67) 章太炎「自史籀之作書，凡九千名，非苟為之也，有其文者必有其諺言。秦篆剝之，『凡将』諸篇繼作，及許氏時，亦九千名。衍乎許氏者，自『玉篇』以逮『集韻』，不損三万字，非苟為之也，有其文者必有其諺言。北宋之亡，而民日皆偷，其隸書無所增；增者起于俗儒鄙夫，猶無增也。是故唇吻所傳，千名而足；檄移所傳二千名而足；細旃之所承，金匱之所藏，箸于文史者，三千名而足；清廟之所奏，同律之所被，箸于賦頌者，四千名而足。其他則視以為腐木敗革也已矣！若其所以治百官、察万民者，則既乎檄移之二千而止。以神州之広，庶事之博，而以佐治者庸是，其庸得不瀆漫棍黠，使政令逡巡以日廢也？」『章太炎全集・尙書初刻本、尙書重訂本、檢論』、第45-46頁。

念頭にあったが、章氏は基本的に1字語を問題にしていた。2千だけでは有効な統治が行えるはずもなく、まして、「いまは外国と貿易を行う。機械、器物が毎日新しくなり、新しい概念も増える。細々とした2千語で、(英語の)6万語と比べれば、その差は数万以上になる。それで西洋の書物を翻訳すれば、大きな困難に直面するのが必至である。」⁶⁸⁾「もし新造した字がなければ、新しく増えた器物の名称も重複することになる」と指摘し、⁶⁹⁾「これでは中国はますます衰退の一途を辿るであろう」と嘆いた。⁷⁰⁾このような難局を打開するには、「小学」、つまり中国の文字学の知識に頼らなければならない。というのは、小学の知識があれば、古代の言語資源を再利用することが出来、語彙不足の問題も解消できると章太炎は主張している。詳細は別稿に譲るが、「訂文」に附されている「正名略例」(初刻本)と「正名雜義」(重刻本)では、新造字による語の欠乏対策が書かれている。

1905年7月29-30日の『申報』に「論訳学当注重小学」と題する文章が連載された。執筆者不明だが、小学の知識は、翻訳にとって欠かせないとし、「意味を正すことにより訳語を決め、字に即してその本義を審らかにすることは、訳者の大事な仕事である(正義以定名、即字以審原、則訳者之要也)」、「翻訳を重要視する時代は、即ち小学を重要視する時代である(注重訳学之時代、即注重小学之時代)」と公言し、章太炎の主張と一脈通ずるものがあった。⁷¹⁾

1906年に入ってから、章太炎は、小学の重要性を繰り返し主張している。

最近、新しい事物が益々増え、新しい字を創作しなければ対処できないと学者はよく言っている。これはもちろん最も重要なことではあるが、しかし大まかに文字学が分からなければ、創作した字はきっと六書の規則に合わないであろう。二文字で1つの語を造り上げることももし文字学を熟知しなければ、適切に作れないであろう。文章の根本はすべて文字にある。唐代以前、文人はみな文字学のこと精通していた。だから文章は優美で、感情に訴えることが可能であった。しかし南宋、北宋の後、文字学が廃れ、すべての術語、用語はでたらめに使われるようになった。人を感動させることは全くない。⁷²⁾

68) 章太炎「今自與異域互市，械器日更，志念之新者日彙，猶暖暖以二千名與夫六万言者相角，其便既相万，及縁傳以訳，而其道大窮。」『章太炎全集・尙書初刻本、尙書重訂本、檢論』、第46頁。

69) 章太炎「然苟無新造之字，則器用之新增者，其名必彼此相借矣。」『章太炎全集・尙書初刻本、尙書重訂本、檢論』、第48頁。

70) 章太炎「烏乎！此夫中国之所以日削也。」『章太炎全集・尙書初刻本、尙書重訂本、檢論』、第45頁。

71) 読解には饒佳榮氏の協力を得た。饒氏は、この記事は劉師培の手によるものだろうとみている。

72) 章太炎「近來學者常說新事新物，逐漸增多，必須增造新字，才得應用。這自然是最要，但非略通小学，造出字來，必定不合六書規則。至於和合兩字，造成一個名詞，若非深通小学的人，總是不能妥當。又且文辭的本根，全在文字，唐代以前，文人都通小学，所以文章優美，能動感情。兩宋以後，小学漸衰，一切名詞術ノ

書物を翻訳することは、文字学に精通していない人は成果を上げられない。何故そう言うか。普通の文章に用いられる名詞は、1万以内である。字数は3千前後である。外来の新しい理論は、十分に表現することができない。古い書籍に求めれば符合する新しい名詞がないわけではない。しかし含まれている意味はやはり微妙に異なる。意味の誤解がある場合、最終的にどう決めるかは、文字学を深く理解しなければ応用できないであろう。晋、唐の時代、仏典を翻訳する人は大抵文字学に精通していた。(中略)今はそうではない。科挙の文章作法を少し習い、蘇軾や王安石の文章を大まかに理解できれば、筆を捨て、軍隊に入る。軽率にも翻訳をする。その文辞は幼稚で、筋が通らない。周詰殷盤よりも難解である。その新訳の書は、人々の蔑視される場所である。以上に述べたように、文字学は、専ら経書を理解するものではなく、すべての学問ための学問である。いわゆる文字学とは、何を指すのか。字形、音声、訓詁のみである。⁷³⁾

要するに英語には単語が多く、中国語には単語が少ない。英書を翻訳するには単語が足りない。それを補うには小学の知識を用いざるを得ないということである。章太炎は、言語表現の区別性を保つには、古典語を用いる以外は、なすすべがないと指摘し、そのために、「近世利俗文字」を文章に取り入れることに強く反対している。

白話と文言は、古代人は分けない。今の人には白話で文言に取って代わろうとする。発想は新しいものと言えよう。しかし結局、白話が文言に取って代われるかは甚だ疑問である。というのは白話にも成語が多用されるからである。例えば「水落石出」「與虎謀皮」などの類で、括弧を付けざるを得ず、すべて白話というわけではない。なお、「勇士」「賢人」は白話にない語で、避けたければ「好漢」「好人」と言わなければならない。「好漢」「好人」は結局「勇士」「賢人」と違う。白話を提唱する人に聞きたい、このような状況を受け入れられるかと。これで分かるように白話の語は意味が不完全であり、場合によって

、語、都是乱攪乱用，也沒有絲毫可以動人之處。」「在東京留學生歡迎會上之演講」1906年7月15日、『章太炎全集・演講集（上）』第9頁。

73) 章太炎「訳書之事，非通小学者，亦不為功。所以者何？通行文字，所用名詞，數不逾萬，其字則不過三千而已，外來新理豈能以此包括？求之古書，未嘗不有新異之名詞，可相影合，然其所涵之義，究有不同。呼鼠尋璞，卒何所取？若非深通小学，何能恣意鎔化？晋、唐之世，訳仏典者，大抵皆通小学。(中略)今則不然，略習制義程式，粗解蘇、王論鋒，投筆從戎，率爾訳述。其文辭之詰訕，名義之不通，較諸周詰殷盤，益為難解。此新訳諸書所以為人蔑視也。如上所説，則小学者非專為通經之学，而為一切学問位之学。所謂小学，其義云何？曰字之形体、音声、訓詁而已。」「論語言文字之学」1906年9月、『章太炎全集・演講集（上）』、第14-15頁。

は文言の語を用いざるを得ない。要するに白話と言っても古語が多く含まれている。文字学が分からなければ、白話もうまく行くはずがないということだ。⁷⁴⁾

章太炎は、また次のように述べている。

農民や牧民は自分の言葉があり、読書人は読書人の言葉がある。これが文言と俗語を分けなければならない理由だ。世の中に読書人は少なく、農牧民は多い。故に農牧民の言葉は素朴である。世の人は、文言を俗語に従わせ、誰でも理解でき、文化も伝わりやすくあれと願うが、これは間違っている。いま「道」「義」という語は、その意味は元々異なる。農牧民の「道」は「道理」という意味で、「義」も同じく「道理」という意味である。またいま「仁人」「善人」も意味が区別されるが、農牧民では、「仁人」は「好人」、「善人」も「好人」となる。もし文言を俗語に従わせれば、何をもって区別させようとするのか。大体俗語は詳細になれない。俗語で人々を教育すれば、意味を混乱させるので正しい理解が得られない。昔仏典の「般若」を解釈しようとした。中国語の意味では「知恵」となる。しかし、「般若」の意味は広く、「知恵」では言い尽くせない。またそれを表す言葉が見つからない。訳さずにその発音を使うことになった。何故か？形而上の言葉は、立派な典籍で完璧になるが、俗語になるほど言葉が足りず、意義が混同するからである。従って教える者は俗語を文言に換えず、翻訳者は文言をもって学説に換えない。⁷⁵⁾難しい表現が好きというわけではなく、もし便利さのために真意を混乱させるなら、むしろ便利さを取らない。⁷⁶⁾

74) 章太炎「白話、文言、古人不分。(中略)今人思以白話易文言，陳義未嘗不新，然白話究能離去文言否？此疑問也。白話亦多用成語，如“水落石出”、“與虎謀皮”之類，不得不作括弧，何嘗尽是白話哉？且如“勇士”、“賢人”白話所無，如欲避免，須說：“好漢”、“好人”。“好漢”、“好人”究與“勇士”、“賢人”有別。(中略)試問提倡白話之人，願意承當否耶？以此知白話意義不全，有時仍不得不用文言也。要之，白話中藏古語甚多，如小学不通，白話如何能好？」『白話與文言之關係』1935年。『章太炎全集・演講集下』、第561頁、564頁。

75) 原文は「不以文言易学説」であるが、これでは意味が通じない。「文言」は「俗言」の誤記か。

76) 章太炎「有農牧之言，有士大夫之言，此文言與鄙語不能不分之由。天下之士大夫少而農牧多，故農牧所言，言之粉地也。而世欲更文籍以從鄙語，冀人人可以理解，則文化易流，斯則左矣。今言道、義，其旨固殊也。農牧之言道，則曰道理；其言義，亦曰道理。今言仁人、善人，其旨亦有辨也。農牧之言仁人，則曰好人；其言善人，亦曰好人。更文籍而從之，當何以為別矣？夫里巷恒言，大体不具，以是教授，適使真意訛，安得理解也？昔經典言般若者，中国義曰智慧。以般若義廣，而智慧不足以尽之，然又無詞以撰代，為是不識其義，而箸其音。何者？超于物質之詞，高文典冊則愈完，通下而詞通缺，缺則兩義棍矣。故教者不以鄙語易文言，記者不以文言易学説，非好為詘詘也，苟取徑便而蔽真意，寧勿徑便也。」『章太炎全集・楮書初刻本、楮書重訂本、檢論』、第217-218頁。

口語の語彙が非常に貧弱であるというのが、章太炎のような中国の伝統的な文字学に精通する人だけではなく、かなり一般的な見方であった。『英華大辞典』（1908）を編纂した顔惠慶（1877～1950）も、

西洋の言葉は文字と一致するので、語が多い。中国の言葉は文字と別れているので、語が少ない。言葉は無尽にあるが、文字には限りがある。数人の力、数ヶ月の努力で中国語と英語の語を対訳し、一冊の中に納めること、しかも正確で間違いがなく、網羅して、漏れがないということは、至難の業である。

と『英華大辞典』の序文に書いている。⁷⁷⁾また著名な宣教師マテア（C. W. Mateer = 狄考文、1836～1908）の夫人である狄文愛徳（A. H. Mateer、1850～1936）は、文語（文理）の語彙は口語（官話）より遙かに多いと言っている。⁷⁸⁾一方、文学革命の議論の中で、劉半農（1891～1934）は、「文語と口語は一時的に対当する地位にあるだろう」と指摘している。その理由は「両者にそれぞれ長所があり、また短所もあるので、片方を排除することができないからである」と述べている。片方を排除できないというのは、文語を俄に廃止してはならないということである。劉氏は、口語は文語に劣るところがあるので、文語から口語への転換は一挙にして成し遂げられるものではないと考えている。「口語の方にとっては、その固有の長所を極力発達させることに加えて、文語の長所を吸収すべきである」と論じている。⁷⁹⁾文語の長所として、劉半農は緻密で洗練された語彙の存在を挙げていた。傅斯年（1896～1950）も口語の形容詞は余りにも貧弱で、その補充が急務だと考えていた。⁸⁰⁾

魯迅と翻訳問題を議論した瞿秋白も、

中国の言葉は非常に貧弱である。日常用品でさえ名称のないものが多い。中国の言葉はまだいわゆる「姿勢語」（ジェスチャー）の程度から脱却していない——普通の日常の会話ではほとんど「ジェスチャー」が欠かせない。自然な勢いとしては、すべての繊細な違

77) 顔惠慶「顧泰西語言與文字合。故其字多。中土語言與文字分。故其字少。語言無尽。文字有窮。而欲以只手之烈。市月之功。舉中西文字。沟而合諸一冊数十百葉之中。謂皆精覈而無舛謬。網羅而無掛漏。無論創者為難。恐因者終虞非易。」氏編『英華大辞典』（上海商務印書館、1908年）の序文。

78) Wenli has a very much larger vocabulary than Kwanhua. *New Terms for New Ideas, A Study of the Chinese Newspaper*. 1913, p.5.

79) 劉半農「我之文学改良觀」、『新青年』第3卷第3号、1917年5月1日。

80) 傅斯年「文言合一草議」、『新青年』第4卷第2号 1918年1月15日。

いや複雑な関係を表現する形容詞、動詞、前置詞などは、ほとんどない。

と述べている。⁸¹⁾

しかし語彙不足の解消法について、嚴復、章太炎は胡適、傅斯年と正反対の方向性を示した。章太炎は、「小学」が翻訳者の基本的素養で、それに基づいて字を選択し、また必要に応じて新字を作成すべきだ、二文字で1つの語を造り上げることももし小学を熟知しなければ、適切に作れないと主張している。嚴復は小学や新作字に関する発言はなかったものの、漢以前の「字法」で概念の区別性を追求し、訳文に難解な字、すでに廃棄された字を多く使っていた。2人の共通点は、1字語に活路を求めることである。一方、胡適、傅斯年は、2字語こそ問題解決の鍵と考えた。傅斯年は「中国語は一字一音、一音一義であるが、同音の字が多く、甚だしきは、百以上も達する。同音の字が多いので、口頭で表現する場合容易に理解できない。さらに一字を付け加えることで、聞く者は容易に理解できるようになる」。さらに一字語を二字語に拡張することにより、書面語では意味が精密になり、口語では聴解可能となる。従って（現代中国語は）一字語を必ず少なくし、二字語を必ず多くしなければならない」と指摘している。⁸²⁾しかし当時の口語に使える二字語は非常に貧弱であり、補充が喫緊の問題となる中、古典が資源として意識されるようになる。傅斯年は、「今日の中国語口語は、極めて素朴である。状況描写に用いる語は、口語よりも文語のほうが表現力において優れている。例えば『高明』『博大』『莊嚴』などは、もし口語を用いて表現すれば、素っ気なくなるのは必至である。このように状況描写の文語の語彙に含意されている美しさ、性質の奥ゆかしさなどは、口語の語彙にはない。口語で表現すれば、大いに色あせてしまう。不足している2字語は、文語をもってこれを満たし、躊躇すべきではない」と指摘している。⁸³⁾胡適も、「文学の国語」を実現するためには、いつでもどこでも「文語の中の二字以上の語を採用すべきだ」と述べている。⁸⁴⁾章太炎の文語（の1字語）が精密であるという主張に対し、胡適は、次のように反論し

81) 瞿秋白「中国的言語（文字）是那麼窮乏，甚至于日常用品都是無名氏。中国的言語簡直沒有完全脫離所謂『姿勢語』的程度——普通的日常談話幾乎還離不開『手勢戲』。自然，一切表現細膩的分別和複雜的關係的形容詞，動詞，前置詞，幾乎沒有。」、『魯迅全集4』（中国文聯出版社、2013）、「關於翻譯的通信（并JK來信）」第287頁。

82) 傅斯年「文言合一草議」、『新青年』第4卷第2号、1918年2月15日。錢玄同も「中国語は、根本的に救えない欠陥がある。それは単音節である。単音節の文字は、同音のものが極めて多い。」と指摘した、錢玄同「中国今後之文字問題」。沈国威著『漢語近代二字語研究』の第1章を参照されたい。

83) 傅斯年「文言合一草議」、『新青年』第4卷第2号1918年1月15日。

84) 朱經農への胡適の書簡、『新青年』第5卷第2号1918年8月15日。陳独秀は、言文一致の方針をとる以上は、できるだけ文語で使用されている上品な語彙を取り入れて初めて純然たる口語と区別される。口語ノ

ている。

章太炎先生のこの言葉は、丁寧に研究した結論ではないであろう。文言の中の多くの字は、最も曖昧で、意味が多岐にわたる。章太炎先生が挙例した「道」「義」などは、むしろ最も一般的な例である。(中略)白話は、文言が区別していないところを区別していないが、文言で区別されたところは、細かく区別している。(中略)要するに、文言では曖昧で、細かく区別すべき所は、白話は、詳細に区別している。文言よりずっと緻密である。章先生が挙例したものは、白話は「大体不具」を証明できないどころか、かえって白話の変化、それが簡単になったにせよ、複雑になったにせよ、すべて理由のある進化であることを立証したのである。⁸⁵⁾

一方、国語改造を提唱した周作人(1885~1967)は、その方法にまず古典語を採用することを挙げている。彼は、「中国語の口語に足りないのは恐らく名詞などではなく、形容詞や助動詞、助詞の類いであろう。例えば寂寞、臃腫、蘊藉、幼稚などはいずれも意味相当な俗語がないので、直接文語の語を用いるべきであるとし、挙例しているのは古典にある2字語である。⁸⁶⁾

6 終わりに

以上、嚴復の「信達雅」について、彼自身の言説を手掛かりにその実際の翻訳行動、同時代の人たちの主張も加味し、その真意を探ってみた。ところで嚴復において、信・達・雅は、いったいどのような相互関係にあったのか。翻訳である以上、「信」は、第一位であって、すべての出発点であろう。対して「達」は、翻訳の究極の目的である。嚴復の言葉を借りれば、「信」は、^{きてん}権輿で、「達」は^{しゅうてん}婦宿である。但し『天演論』の時代では、潜在的な読者のために

ゝの中によく用いられる文語の語彙、例えば豈有此理、無愧于心、無可奈何、人生如夢、万事皆空の類いはできるだけ取り入れるべきである。必ず文章を口語に近づけ、口語を文章に近づけることを求めなければ、「文言一致」は実現できないであろうと指摘している。「錢玄同への陳独秀の書簡」、『新青年』3巻6号、1917年8月1日。但し、陳氏が意識しているのは四字成語のようである。

85) 胡適「(章先生) 這話也不是細心研究的結果。文言里有許多字的意思最含混，最紛歧。章先生所舉的‘道’‘義’等字，便是最普通的例。(中略)白話對於文言應該分別的地方，都細細分別；對於文言不必分別的地方，便不分別了。(中略)總之，文言有含混的地方，應該細細分別的，白話都細細分別出來，比文言細密得多。章先生所舉的几个例，不但不能證明白話的‘大体不具’，反可以證明白話的變繁變簡都是有理由的進化。」「国語的進化」、『新青年』第7巻第3号、1920年2月2日。

86) 周作人「国語改造の意見」『東方雜誌』第19巻第17号、第7-15頁。

種々の創意工夫を施さなければ、「達」は実現できそうもない。かといって、その創意工夫は「信」を破壊しかねない要素でもある。このような「信」と「達」の矛盾に対し、嚴復は、「達のためであることは、即ち信のためである」と言っている。(6) 伝達は、原著に対する最大の忠実であるという意味であるが、その時代しかあり得ない特徴を的確に捉えた嚴復なりの言い回しと言えよう。一方「雅」は、「行遠」の必須条件として「信、達」の上で求めるべきものとしている。嚴復は、「思うに文辞たるものは、概念を運ぶ媒体で、感情を伝える音声である。故に粗雑な語句は、精密な概念を運べず、低俗な表現は真面目な感情を伝えられない。中国の文章は、美しいものは、司馬遷、韓愈を超えるものはない。司馬遷曰く、志の清いものは、その言葉も芳しい。韓愈曰く、文章は難易の別がなく、ただ真実のみである。私も文章に関しては、深遠高雅を求めるのではなく、真実を求めるだけである」と主張している。⁸⁷⁾ 漢以前の文章に「正軌」を求め、漢以前の字辞を用いて精密描写の可能性を追求する、「達」を実現するためには古典的素養が不可欠で、「達」を最終目標として追求すれば、おのずから「信」も達成される。これが「信达雅」に秘められた嚴復の翻訳理論と実践である。嚴復の「雅」は、胡適の「文学的国語」や周作人の「国語改造論」の前触れとも捉えられるであろうが、「達辞」としての「達」は「諭諸人人」（民衆教育）であり、「行遠」としての「雅」は、一般民衆の切り捨てに繋がる。両者を解消できない矛盾として捉え、自ら「諭諸人人」という啓蒙の責務を放棄した嚴復の翻訳は、その訳語も含め、ポスト啓蒙時代において見向きもされなくなるのも宜なるかなである。

いかなる言説も、歴史的文脈から離してはならない。「信达雅」もしかり。嚴復の「信达雅」は、1896年当時の訳者、読者、訳出言語の諸事情と多岐にわたって絡まり合っていた。その後、読者も、そして訳出言語も大きく様変わりをし、訳者である嚴復も、『天演論』以降の翻訳において、言語社会の変化に呼応すべく少しずつ変化を見せた。そのためか、「信达雅」の解釈も曖昧となった。もちろん後の翻訳者や研究者は、必ずしも嚴復の通りに「信达雅」を解釈する必要はない。必要なのは、嚴復の真意を押さえた上で、なぜその解釈が嚴復と異なる方向へ発展し、一般化したのかを考究する態度である。

「信达雅」説成立記略

- 1894年末か1895年初、嚴復はハックスリーの論文集を入手し、閲読。

87) 嚴復「窃以謂文辞者，載理想之羽翼，而以達情感之音声也。是故理之精者不能載以粗獷之詞，而情之正者不可達以鄙倍之氣。中国文之美者，莫若司馬遷、韓愈。而遷之言曰：“其志潔者，其称物芳。”愈之言曰：“文无難易，惟其是。”僕之于文，非務淵雅也，務其是耳。」「與梁啓超書二」、『嚴復集』第3冊、第516頁。

- 1895年2月から嚴復は「論世變之亟」「原強」「救亡決論」等を執筆し、新聞に発表する。文章にはハックスリーの論点が入り入れられている。
- 1895年夏頃から、嚴復は他の執筆活動を一旦中止した。翻訳準備のためか。
- 1896年10月、手稿（第一稿）完成、「赫胥黎治功天演論」と名付ける。巻頭に1896年10月15日付の「訳例」を付し、4箇条からなり、「達」について論ずる。
- 1896年8月までに嚴復は吳汝綸と文通を開始、吳氏に『天演論』手稿を友人づてに届け、添削を懇願。
- 1896年夏から嚴復は『原富』の翻訳を開始、同10月30日までに原著37頁まで訳了。
- 1897年3月、吳汝綸は私信で『天演論』について意見を述べる。
- 1897年11月までに、嚴復は吳氏の助言を取り入れ、『天演論』を訂正・潤色する。
- 1898年3月11日までに嚴復は『天演論』の「吳序」を受け取る。
- 1898年6月10日付で「訳例言」が完成、冒頭に「訳事三難信达雅」とあり、「信、雅」の内容が加わる。
- 1898年6月10日までに嚴復は『原富』の原著を146頁ほど訳し（甲部、篇十）、難解の方が多く使用されている。「漢以前字法」の実践か。
- 1898年6月、『天演論』公刊。

【付記】 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金：基盤研究C「日中における言文一致の語彙的基盤に関する研究（A Study on the Lexical Basis of Japanese-Chinese Language Consistency）」（2022年度～2024年度、研究代表者：沈国威）による成果の一部を含んでいる。